
レナドゥの経典

土師 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レナドウの経典

【Nコード】

N0811G

【作者名】

土師 玲

【あらすじ】

砂嵐に閉じ込められた半島、その中の一国で、大学院の教授が殺害される。その助手をしていた少女、カサギはそれが半島を孤立させている砂嵐と関係があるとみて、調査をはじめた。すると、歴史に埋もれたある一族が浮上してきて……。

第一章 動き出すゆがみ

一 動きだす歪み

薄曇りの空の下………城、と呼んでも差し支えのない大きさの塔へ続く道を、ひとりの少女が歩いていていた。

両腕いっぱい羊皮紙の束を抱え、ふらふらと歩く様は、かなり危なっかしい。

同僚たちには、しょっちゅう、身体感覚がない、とからかわれるくらい、その少女はよくなにもないところで転ぶ。

少女の名は、カサギ・プロウウィン。

十七歳という年齢にはとも見えない小柄な体に、大きな貫頭衣をまとっており、そのせいで、余計小柄に見えた。

濃い茶色の髪を肩口で真っ直ぐに整え、顔は全体的に小さくてまろく、凜とした金色の、大きな瞳を持っており、それが彼女を少年のように見せている。

体つきはそれなりに女らしくなったので、今では間違われづらくなったものの、今まで散々男の子だと思われてきた。

「まったく、せめて誰か一人つけてくれてもよさそうなのに。私の小さくて短い腕じゃ、大して運べないし……絶対にこれは、嫌がらせだ。」

どうしてあの教授はこう、ひとをからかうのが好きなんだ。

あとで、お前はアリ並みに小さいとか言っつて、わしがバカだった、そんなことにも気付かなかったとは、とか言っつんだ。

「……絶対にっ」

カサギは半眼でぼやいた。

その視界に、白い、巨人の骨が突っ立っているような建物がうつる。

トルノイヴ大学院。

ダラニドルク帝国の帝都内にある、あらゆる知識の集積所にして、生産する場所。だとカサギは考えていた。

それと、支配者が支配するための学術を学ぶ場所でもある。帝国だけでなく、この大陸にある国で実権を握る者たちは必ず、ここで帝王学と言えるようなものを学ぶのだ。大きな視野と、人心を掌握するために必要なことがらなどを。確か、統治学とか呼ばれていた。

「本当の知識人たちとは、実は変人なのだろうな」
呟いて、溜息をつく。

内心、そんな彼らを見ているのが嫌になることもある。カサギは、貴族の名を持つてはいても、所詮は養子。もともとは孤児院育ちだから、下層で生きる人々のことを知っている。彼らが理不尽な環境で死んでいくことも。

知識が、富めるものと貧しきものとを分けるなら、そんなものな方がいい。と考えたこともあるが、学び知る楽しさは捨てられなかった。

カサギは今、考古学を研究しながら、教授の助手として働いている。

楽しくてたまらないし、そうして名を残すことで、養父母に対しての礼も出来るのだから、充実しているといえる。

カサギは、空気に混じった水分を感じて、足を速めた。

いま帝国は雨期に入っている。

恵みの雨ではあるのだが、いつ何時、凄まじい勢いで降りだすかわからない。文献を守るために急がなくては。

そう思って走りだすと、前方から見知った顔がやってくる。

カサギは立ち止まって、相好を崩した。手伝ってもらえると思ったからだ。が、やってきた青年は険しい顔をしていた。

「カサギ！ こんなところにいたんだね。とにかく早く来てくれ」
青年は緊張をみなぎらせ、カサギを急ぎ立てた。

「どうした、何かあったのか？ ファナラト」

カサギは、大学院に入ってからずっと友人としてつきあってきた
ファナラト・トゥニットを見て、顔をしかめた。

いつも飄々としていて、冷静な彼がこんなに取り乱す事態とはな
んだらう、と不安になる。

脂の多いものを食べすぎたときみたいに、胃が落ち込む。カサギ
は、自分より頭二つも背の高い、どこか遊び人風の、端正な顔立ち
をした青年、ファナラトを見た。

ファナラトは、真っ直ぐにカサギの目を見て、唇を震わせた。

背でゆるくたばねた、赤みの強い茶色の巻き毛が揺れる。まつげ
の多い、やや吊り気味の灰褐色の瞳は、陰りを帯びて、曇りきって
いる。

「教授が、タイラー教授が、死んでしまったんだ」

「な、なんだと！」

カサギは思わず羊皮紙をすべて取り落としてしまった。

「ナルマヴレだ……ナルマヴレに、殺されたっ！」

ファナラトは、唸るように言う。怒りが、全身から発散されてい
るように、カサギには見えた。

カサギの頭のなかは真っ白になった。

現実のこととは思えない。

空で、雷が小さく鳴った。

その音にはっとして、取り落とした羊皮紙の束を拾い集めると、

カサギは意を決したように言った。

「とにかく、研究室へ行くんだらう？」

「うん。急ぐ……もうすぐ、警備兵がやってくるけれど、その前
に、君にも教授が残したものを見てほしい」

「ああ」

カサギは力強く頷くと、羊皮紙の束を半分ファナラトに押しつけ
た。

「手伝ってくれよな。急ぐんだから」

ファナラトは、びっくりしたように、手元の羊皮紙を見て「うん」

と少し苦笑気味に頷いた。

「行く」

その言葉に、カサギは頷き返すと、走り出した。

すると、前方から、雨になるというのに建物から出てきた女がいるので、カサギは目を細めた。赤い模様のついた白い布で全身を覆っている。女は凄まじい早足で、大学院から離れて行った。

カサギは不可解に思いながらも、振り返ることはせず、走った。

二人の姿が建物のなかに消えてから数拍後、雨が降り始めた。

雨は、ほんのひと時の間に、豪雨となって、街のなかの砂を洗い出そうとするように、大地を打ちのめしだした。

「教授……」

カサギは、涙腺から溢れそうになる涙を押しとどめようとして、唇をかんだ。

タイラー教授は、様々なことを書きしたためた紙が散らばる机に、突っ伏すようにして死んでいた。背中からはおびただしい血が流れ、まるで、生命そのものが流れ出ているように見える。

不快な鉄錆臭が鼻のなかにただよう。

研究室のすぐ横に作られた教授室。普通の人が想像するよりかなりせまいそこには、簡素な木の棚がいくつも並んでいる。やや薄汚れて酸味を感じさせるにおいの漂う室内には、教授が人生をかけて調べていた様々なもの、特に大陸に古くから住む先住民の文明について収集したものがところ狭しと並べられていた。

それら一つ一つを、丁寧に説明しながら見せてもらったことを、カサギは思い出した。

「カサギ、ほら、教授の手元を見て」

ファナラトが、人差し指で示す。カサギは示されるままそこを見て、眉間にしわを寄せた。

「これは……？」

カサギは首をかしげて、そのものに顔を近づけた。

それは、ふるびたコインだった。錆びてすりきれた、明らかに不純物の入り混じった銀貨。見たことのない人物の横顔が浮かびあがっている。

「古代の銀貨だよ。教授は、それを手に入れてから、突然にタヴァト族を調べ始めていたんだ。僕は、理由を問うたけれど、まだ確信を得ていないからと、何も教えてもらえなかった」

「タヴァト族って、あの北の辺境に独自の国家を形成している、あの変わった人々のことか？」

カサギは、銀貨からファナラトへと視線を移動して首をかしげ、その後で室内を見回した。確かに、よく気をつけてみていれば、タヴァト族の過去にまつわる文献や、物品が増えている。ということは、この銀貨もそのひとつなのだろう。

「そうだよ。彼らと、僕らの現状に大きなかわりがある、と教授は踏んだんだと、僕は、思っている」

「そうか……私は、気づかなかった」

よく見ると、今日頼まれた文献のなかにも、タヴァト族にまつわるものが圧倒的に多いではないか。カサギは悔しさにうつむいた。

胸のなかで、氷が生まれたような息苦しさをおぼえる。

ふたりは押し黙ってしまった。今はただ、感情を抑えるだけで必死だった。すると、何の前触れもなく戸が開いた。

「君たちは……教授の助手だった子たち？」

戸を開けた女性兵士が疑わしそうに訊ねてきた。その後ろには、若い男の兵士が三人……うち一人は調書らしきものを手にしていた。革の鎧や、鎖帷子をまとい、帝国所属であることを示す、蛇を象ったマント留めをつけている。全員、帯剣していたが、それぞれの剣は微妙に長さや形が異なっていた。

帝国では、警備兵が殺人などの事件を担当している。

カサギとファナラトは頷いた。

戸口に立っていたのは、驚くべきことに、女性の警備兵のようで、兜の赤い房飾りからして、隊長格らしいことが分かる。

兜の隙間からのぞく細い、夜明けの空みたいに鮮やかな群青色の瞳と、顔にかかる波打つ黒髪が神秘的だった。背が高く細身で、女らしいのに、甘さがまるで感じられない、研ぎ澄まされた刃のような雰囲気を持っていた。

「北の、ご出身ですか？」

不意にフアナラトが訊ねると、女性兵は、怒りと屈辱と諦めがなймаぜになったような独特の目つきで「ええ」と頷いた。

カサギは慌ててフアナラトの腕を肘で小突いた。

少し前、現状が北の民族のせいだという噂が流布して、北出身の者たちが無差別に虐殺される事件があったのだ。カサギは、その頃まだ孤児院にいて、親を殺された北出身の子どもたちが続々とやってくるのを見ていた。

その後、子どもたちは自殺したり、うっかり外に出て殺されたりして、ほとんどが生き残れなかった。

凄惨だった。

フアナラトもはっとして、口をつぐんだ。

鎖帷子に包まれた彼女の体には、傷がたくさんある。カサギは、それを見て、現状の打破がどうしても必要だと感じた。それをつきとめようとした教授は、殺されてしまった。

非道い。

カサギは、再びあふれてきた涙をこらえた。

いまは、泣くべき時ではない。泣くべき時は、後で必ずやってくるから、今は、ここで見たものを彼女に伝えなくてはならないのだ。「あたしはレイエネ。帝都の警備兵南駐屯所の所長をつとめているわ。あなたがたは、フアナラト・トゥニットとカサギ・プロウウインね。」

とにかく、事情を教えてくださいませんか。

「ここではなく、外でね」

「はい」

カサギは涙声で答えた。すると、所長、レイエネは、カサギの肩

をぼんぼん、と軽く叩くと、肩を抱いて部屋の外へと連れ出されてきた。

「後は頼んだわよ」

レイエネは、連れてきた部下らしき兵士三人に告げると、そのまま外へと出て、研究室を抜け、大学院の一階にある、応接室を兼ねたエントランスで立ち止まった。

外では、雨が降っているらしく、甘い水の香りが鼻腔に届いてきた。中では、事務所に用のある学生や、来客の相手をしている講師や教授たちの姿がある。エントランスには、いくつかのテーブルや椅子が置かれており、かれらはそこで談笑していた。みな事件を知らないうらしく、楽しそうに笑っている。

恵みの雨が降っていることを喜んでいるようだ。カサギとて、いつもだったら、雨が降るとうれしくてたまらない。それだけ、この乾燥した土地にとつて、雨は嬉しいのだ。

しかし、いまのカサギはそんな気分にはなれなかった。

「座つて、教えてくれる？ タイリー教授はなにを調べていたの？

犯人に心当たりはある？」

「教授は、北の辺境に住む、タヴァト族を調べていました」

フアナラトが座りながら嘆息交じりに言った。

カサギはそれにならつて、彼の隣に腰掛ける。

「ナアルマヴレだ。そのせいで、教授は狙われて、殺されたんだ」

吐き出すようにフアナラトは言い、テーブルの上で拳を強くにぎった。

レイエネは、少し虚ろな表情を浮かべた。

「ナアルマヴレ……砂嵐。閉ざされた国々」

憂鬱そうに、そうつぶやく。

「そのせいなんだ。きつと、私もそう思う。教授は、あれをなんとかしようと思死だった。あれの正体を知りたいと前に進んで、進みすぎて、死んでしまったんだ。

私は、そう思う。

この、サナラム半島から出られないのは、あの砂嵐のせい。誰も
が知っている通りのことだが…………。

神話の、魔神の名前を冠されたあの砂嵐。あれは、自然に生まれ
たものじゃないと教授は、言っていたんだ。だから、私たちは、あ
れが起こる原因を調べ続けてきた。

教授の言っていたことを、信じたから。

その教授が、タヴァト族を調べていた。なにかが、あるんだ。絶
対に」

カサギは、自分に言い聞かせるように言葉を並べた。

「つまり、事件の真相はタヴァト族にあり、と言いたいよね？」

「そうだ」

カサギは力強く頷いた。涙はもう乾いていた。

「とにかく、もう少し調べて、上に報告をしてみるわ。ふたりとも、
身元は知れているのだから、家に帰っていいわよ。ただし、勝手な
行動は慎んでね。今一番怪しいのは、あなたたちなのだから」

「ええ、分かっていますよ」

顔をしかめると、ファナラトは投げやりに答え、椅子から立ち上
がり、カサギに手を差し出した。

「行こう。不愉快だ」

「あ、ああ」

カサギはその手を取り、レイエネに軽く会釈すると、ファナラト
に引きずられるままに歩きだした。ふと振り向くと、レイエネが苦
笑したようにも見えたが、よくは見えなかった。

雨はもう上がってしまった。

ふと、言いたいことを思いついたが、ファナラトに止まる様子
はない。カサギは目の前で揺れる、ファナラトの赤茶色の髪に目を止
め、ふむ、と唸るとひっぱってみた。

すると、彼は立ち止まり、カサギの手をはなすと、振り向いて迷
惑そうに顔をしかめた。

「なにするんだよ、カサギ」

「なあフアナラト。勝手に動くなと言われたけれど、私は色々調べようと思う。ただで引き下がるなんて嫌だ。他人に任せ切りも嫌だ…………お前は、どうしたい？」

訊ねると、フアナラトはすこし驚いたように眼を見開き、次いで頭を掻くと、

「……………僕も、嫌かな」

と、笑みをまじえて言った。

「じゃ、協力してくれ。私ひとりでは、効率が悪いからな」

「分かったよ。じゃあ明日、図書館で会おうか。計画をたてよう。

僕が迎えに行くよ、明日はちょっと野暮用があるんだ。それが終わってからってことで」

「うん。ありがとう、フアナラト。明日、またな！」

カサギは、嬉しさに笑みを浮かべると、フアナラトと別れ、家に向かつて歩きだした。舗装された道のそこかしこに、水たまりが出来ている。それをばね散らかしながら、カサギは走りだした。

第一章 動き出すゆがみ（後書き）

中途半端大魔王の土師玲です。

はじめましての方ははじめまして。そうでない方はお久しぶりです？

この話は、昔書いたものを改稿して載せています。そのため、一章がすごく長いです。見づらくて申し訳ありません。

舞台も、よくあるヨーロッパではなく、中東をイメージして書いているので、とっつきにくいかもしれませんが、もし楽しんでいただければ嬉しいです！

第二章 心の闇

二 心の闇

プロウウィン家は、帝都のなかでも裕福な層が住む、東の街区にある。

サナラム半島の国々のなかで最も大きく、豊かな帝国ではあるが、陸からも、海からもほかのところへ行けないため、建築材料は限られている。そこで、最も豊富にあるものが使われている。土だ。

そのせいで、くすんだ黄土色の、装飾のまるでない家が並ぶ。

殺風景な風景だが、見慣れた者にとってはふつうだ。そうでないものにとっては、奇妙な印象を与える。遠くから見たならばさしずめ、土で作られたモザイク模様のようらしい。

貴族たちは、そんな殺風景ななかでも、なんとか色彩豊かに暮らそうと、壁にタイルを張り付けたり、鮮やかな布地を使ったり、窓のところに工夫を施し、大きくて暮らしやすい、美しい住宅をつくりあげた。

そのうちのひとつで、カサギは暮らしている。

「カサギ様、お客様です。レイエネ・キマリーエとおっしゃるお方で、客間にお通ししておきました。よろしかったでしょうか？」

「レイエネが？ うん、ありがとう」

朝食後、私室で調べものをしていたカサギは、小間使いの言葉に驚いたものの、とにかく客間に急いだ。

なにか、分かったのではないか、と思うと気がはやる。

カサギの私室は三階部分にあり、客間は一階だ。大急ぎで階段を下りると、戸口代わりに掛けられている、ややくすんだ緑色の、毛織の垂れ布を跳ね上げて中に入った。

「あら、おはよう」

「お、おはよう。あの……なにか分かったのか？」

「いいえ、全然、まったくよ」

レイエネは素っ気なく答えて、銀のちいさな器で出された茶をすった。カサギは上がった息を整えつつ、がっかりして床に腰を下ろす。客間には毛足の長い絨毯が敷かれ、その上に、毛皮が乗せられ、座れるようになっていいる。帝国では、基本的に、くつろぐときは床に直接座り込むのがふつうだ。食事時も、貴族ではない庶民の家では、床に座ってとる。

カサギは、座した場所に敷かれた白い毛皮を撫でつつ、訊ねた。

「何だ……それじゃあ何の用で来たんだ？」

不満が言葉ににじむ。

「昨日も言ったでしょう？ 上へ報告してから、あなたたちの処分を決める、と」

「ちよつ、処分ってなんだ？ 私もファナラトも、何もしていないのに！」

「まあまあ、落ち着いて。」

話はちゃんと最後まで聞くものよ。あたしは、上へ報告したのよ、余すところなくすべてをね、そして、返ってきた返答は、タヴァト族を調べろっていうものだったのよ。

もちろん、あたしたちはかの一族については何も知らないから、処分という名目で、あなたたちに協力してほしい、ということなの。ほら、大学院は独立した機関でしょう。皇族でもなかなか手出しできないから、理由が要りようなのよ。

で、調査隊を組むことになったのだけど、その隊の隊長を、あたしにしろというの。そして、あなたか彼のどちらかに、副隊長を務めてもらうことが決定されたそうよ」

「なんだって！」

カサギは頭を抱えなくなった。

あまりにも急すぎて、気持ちがついていかない。無茶苦茶だ。

「あなたと、彼以外に、タヴァト族に詳しいひとはいる？」

「いや、あとは助教くらいだと思う。教授は、それを察すること

のできた者にしか真相を教えてくださいなかつたから」

「そう、じゃあやっぱりあなたと彼は、あたしたちに同行してもらうしかないわね。助教授は連れて行けないもの」

レイエネはそう言い結ぶと、茶を飲み干して席を立つ。

「今日はこれで帰るけれど、細かいことが決まったらまた来るわ。嫌とかそういう苦情はなしよ。あなただって知りたいでしょう？」

教授の死の真相を」

「……………」

カサギはやつとそれだけ言うと、立ち去るレイエネの背を見送った。

ここを、離れなくてはならない。

養父母には何と言おうか。

ふと、心が弾んでいることに気付いた。生まれてからずっと、帝都から離れたことがないけれど、広い世界に憧れていた。邪魔な砂嵐さえなければ、世界はもっと広いだろうと思っていた。

その謎を解くために、半島を歩いて回れる。

カサギは、立ち上がって私室へ戻ると、簡素な部屋を見た。ただ、じつくりと。

今までありがとう、という気分で。

午後になると、いつもの楽な服装で、ファナラトがやってきた。

カサギは、図書館に行く道すがら、レイエネが来て告げていったことを話した。すると、ファナラトは、複雑そうな表情を見せた。

「頼りにされていると思えばありがたいけれど、利用するだけ利用して後で捨てられたりしなければいい、と思うよ」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味。つまり、今は利用価値があるから使っけど、全部終わった後で、始末される恐れがあるってことだよ」

「始末……………殺されるというのか？ まさかそんなこと」

「甘いなあ、カサギは」

ファナラトは力なく笑って、黙ってしまった。それ以上はなにを話したらよいか分からず、カサギは黙って良く晴れた通りを歩いた。

図書館は、あくまでも書物の収集のためにだけ存在している。ゆえに、利用者はごく一部の人間に限られていた。たとえ貴族であっても、学術的、または政治的な仕事をしていなければ、入場も閲覧も不可能だった。

図書館へと続く通りの人通りはまばらで、およそ活気というものが無い。

現在、国で調べたところによると、人口が減っているらしい。確定したことはないらしいが、カサギはそれも仕方ないと思っていた。

あまりに限定された物資の奪い合いをしながら、半島の人々は暮らしている。貧富の差はすさまじいものがあり、今は裕福であっても、将来的にはどうなるか分からない。

自殺者も増えたそうだ。

「放っておけば、いずれ人間は滅んでしまっただろうか？」

ふと、口に出してしまった。

カサギははっ、として口をふさいだ。目線をあげて、ファナラトを見やる。ファナラトは、カサギを見て、暗い笑みを浮かべた。

「滅ぶなら滅ぶがいい、と僕は思っているけどね。どのみち、人間なんて、いつかは滅ぶはずなんだよ。それが今だったとしても、驚くようなことじゃないさ」

「ファナラト？」

カサギは、不意に違和感を覚えて、隣を歩くファナラトを呼んだ。「そうだよ。人間なんか、滅んだ方がいい。いつまでも戦いをやめないで、殺しあって、戦わなくなっても、奪いあって、他者を虐げる。動物よりひどいじゃないか。」

少しでも、自分の地位やプライドを傷つけられただけで、凄まじく相手を憎む。

僕の家族なんか、家族なんてものじゃないさ。ただの、血と肉が詰まった皮膚だよ」

「お、おい！ お前、変だぞ……どうしたんだ？」

カサギは立ち止まってファナラトの腕を強くつかんだ。ファナラトは、びくつ、として悲痛な表情でカサギを見て、力なく笑った。

「ごめん。その……今日は帰るよ」

「何か嫌なことがあったんだろう？ 私でよかったら、話を聞くぞ？」

カサギは、必死で言った。このまま放つてはおけない。ファナラトは、カサギにとっては兄のように慕っている大切なひとだ。その彼が傷ついているのを見るのは、つらい。

「いや、君はまっすぐなひとだから、なにも言えないよ。君のなかのきれいな世界を、壊すつもりはない」

ファナラトは、そう言うと、そっとカサギの腕を外して、歩き去っていく。

カサギは動けなかった。

全身が水につかってしまったように、体が動かない。これ以上、踏み入るなど、ファナラトは、宣告したのだ。だから、カサギには追えない。

最も近い他者に、手を差し伸べることも出来ない。

その事実を、カサギを確かに打ちのめした。

第三章 現われた青年

三 あらわれた青年

皇族一家が住み、日々の政務が取り仕切られ、各地方の統治者が集い、皇帝に決定を求める場所こそ、ティファグーノ宮殿である。華麗にして壮麗。

岩石などからつくられる、朱色の塗料をふんだんに使い、壁には神話や、草花などの彫刻が施されている。全体は正方形をしており、一階部分が政務など公共の場であり、二階が生活の場、三階は祈りの場となっている。

とにかく広大で、近くに設けられた貯水池の水を使って、薔薇などが栽培されているちいさい庭園は、緑という色が珍しいこの国々の人々にとっては、黄金にも勝る美しさだ。

ほとんどが石造りの内部には、ほとんど砂がない。風や、ひとの着物にくっついて運び込まれる砂は、毎日大勢の使用人の手によって掃きだされており、ほこりっぽさも薄い。まさに別天地である。

カサギは、そんなとんでもない場所に來られるなどは夢にも思っていないかったので、ガチガチに緊張していた。

いちおう、礼装を着ているが、なんだかしっくりこない。帝国の礼装は、たつぷりと布地を用いた、華麗なものだ。男性は金系銀系を使った色鮮やかなチョッキと、髪を隠すターバンを巻き、ゆつたりしたズボンを書く。女性は、装飾品をこれでもか！ とばかりにつけられる。頭、腕、指、首すべてに、金細工の飾りが揺れている。そこに、原色鮮やかな裾の長い衣装をまとうのだ。カサギには、鮮やかな赤紫の衣装が、やけに重く感じられた。

「そんなに緊張しなくても、大丈夫だよ。陛下は穏やかで優しい方だし」

苦笑気味に言ったのはファナラトだ。

「だが、失礼があつてはならないし、私はそもそも、こんな場所とは特に全然まったくさっぱり縁のない人間だったはずだから、なんというか、ああっ！ 不安だっ！」

「落ち着いて、僕が教えた通りにふるまっていれば大丈夫だから、ね？」

フアナラトはカサギの背をさすりつつ、困ったように笑った。

二人が今いるのは、宮殿のエントランスで、アーチを支える美しい円柱が林立している。床は白と灰色と、黒の大理石のモザイクで踏むのも恐ろしい。うっかり転んで、なにかを壊したら、と思うと足を踏み出すのにすら勇気が必要だ。カサギは、びくびくしつつ、前方から宮殿付きの小間使いを連れて歩み寄ってきたレイエネを見て、言った。

「レイエネ、私は、どうしても謁見をしなくてはならないのか？」

「残念ね。帰ったりしたら無礼になるわよ。いい加減、覚悟を決めなさいな。」

あなたはこれから、調査隊の隊長として、皇帝陛下にごあいさつし、こうなった理由や原因を説明するのよ。

昨日、急に伝えたことだったから、混乱するのも仕方ないけれど、諦めて。なるようになるわよ。あなたはひとりじゃないし」

「つつ」

カサギは呻いたものの、結局おとなしく、謁見の間へと連行された。

謁見の間に至る入口は、巨大なアーチで、壮麗な柱によって支えられている。

一階部分の最奥に位置するそこは、まさしく異空間さながらだった。外からは、まばゆい日光が惜しげもなく降り注ぎ、吹き過ぎゆく風には気分を落ち着かせる香の匂いが混じりこんでいる。薄暗い天井と、輝く床面のコントラストは、まさに小さな天と地だった。

カサギはその最奥に置かれた玉座に座する人物と、その左右にずらりと並んだ、勇壮で重々しい衣装に身を包んだ近衛兵たちの姿に

圧倒された。

彼らのさらに手前には、大臣などの重鎮たちが揃っている。

「良く来たな。顔を見せよ」

柔らかな声がした。カサギはゆっくりと顔をあげた。

天上人と思っていた皇帝の姿が視界に映る。壮年の、威厳が人間として現れたような男性だった。意外に地味な衣装をまとっており、白い毛皮のマントに、ゆったりしたそでの、丈の長い生成色の貫頭衣という姿だった。額には、皇族である証明でもある金のサークレットがはめられている。一応貫頭衣には、金糸や銀糸で飾りぬいがされ、腕や足や耳には、様々の装飾品が飾られてはいるが、まわりにはべる近衛兵の方が、兜に羽飾りをつけていたりしているせいで、派手なくらいだった。

「報告をいたせ」

「は、はい」

カサギは、ごくりと喉を鳴らした。誰も何もしゃべらない。こんなにたくさん人がいるのに、しわぶきひとつ聞こえない。異様な空気に飲まれそうだった。心臓が焼けつきそうで、今にも倒れそうな気分だ。

が、カサギは勇気をふりしぼり、口を開く。

「先日の、タイリー教授が殺害されたことと関連し、我々は、北方のタヴァト族が疑わしいという見解を抱きました。

教授は、彼らを調べ、彼らとあのナルマヴレとが関連していることを突き止めました。そのせいで、詳しいことが私たちに話される前に、教授は命を落とされてしまいましたので、我々は、教授に代わって、彼らを調べに行きたいと思っています。

陛下に、吉報をお知らせできるよう尽力いたしますので、どうか、我々の調査に協力をお願いできませんでしょうか？」

それは、軍部の、皇太子の言葉でもあった。

皇帝陛下に話を通さねば、軍は派遣できない。軍部の総帥、つまり皇太子は、兼ねてから北の地に疑心を抱いていたのだ。今回のこ

とは、恰好の口実になるとし、レイエネに謁見を命じた。そして、謁見し、説明をする役目が、最もそのことに詳しいカサギとなった。理由は、最も陛下の心を動かしやすいだろう、というものだ。「本当に、タヴァト族が怪しいのか分からねば、それはできない。しかし、調査をするのは良いだろう。ただし、かつて我々は、彼の一族に不義を働いてしまった。

決して、彼らの不興をかわぬように調べ、報告をせよ。

以上だ」

「はい。ありがとうございます」

カサギは、精一杯微笑んで、頭を垂れた。

そつと後ずさり、謁見の間を退室する。外に出ると、カサギは、ほろっと息をついた。異次元から抜け出せたような、そんな感じだ。ファナラトやレイエネに、しきりに感心されながら、カサギはふと、日々をあんな場所で過ごさねばならない皇族のひとたちは、息が詰まらないのだろうか、と考えた。

その夜のこと、カサギは養父母に事の次第を告げた。

もう黙っているわけにもいかないし、旅支度もせねばならない。

「お前が本当にそうしたいというなら止めませんが、でも、危険なことにだけは、近づかないで、そして、ちゃんとここに帰ってくることに。」

それが約束できないなら、行かせません」

「もちろんです。ここが私の家です……帰ってくる場所なんて、ここしかないです」

カサギは、手にした薄べったいパンに、豆を煮たものをのせて微笑んだ。

あまり大きくない長方形のテーブルには、様々な料理がところ狭しと並べられている。色をつけた米もある。鳥を香辛料で辛くとりと煮たものや、羊のシチュー、レバーをペーストにしたもの、内臓の煮込み、新鮮なチーズや、果実類などだ。

北の大地と違って、野菜類は採れないが、果実類は豊富で、それらを食べやすく切ったものは、大皿にどん、と盛られていた。それらは、一般的な金持ちの食卓で、庶民はそれらのうちひとつでもあればごちそうである。

金属の器に山盛りにされた料理は、獣脂のろうそくの炎に照らされ、幸せの象徴であるかのように輝いているように、カサギには見えた。

「親も、父上と母上だけです。大丈夫です……陛下にもくぎを刺されました。危険には近づかないようにしますし、レイエネさんや、兵も数名つけてくれるそうです。」

それに、帰ってきます。

私は、あなたたちの子供なんです。少しは信用してください」

「そう、そこまで言うのだったら、もう止めないわ」

義母は少し寂しそうに笑って、義父と目線を交わした。

義父は静かに頷いて、

「気をつけて行ってくるんだぞ」

とだけ言って、黙々と食事を続けた。

カサギは「はい」と頷いて、パンを口に入れた。辛くて、あまりおいしくて、最初は何ごとかと思ったこの味にも慣れた。今では、なじんだ味。この味を味わいに、またここへ帰ってくるのだ。

そんなことを思いながら食事を続けていると、使用人が困ったような様子で顔を出した。

「あの、お食事中申し訳ありません。」

キマリーエと名乗る警備兵が、カサギ様に緊急の用件があると「使用人の言葉はそこで途切れた。」

戸代わりの毛織布が荒々しく跳ね上げられ、レイエネ自身が顔を出したのだ。カサギはびっくりして立ち上がった。

「れ、レイエネ！ どうしたんだ？」

「カサギ、すぐに来て頂戴」

レイエネは緊迫した様子で言いながら、ずかずかと入りこんでく

ると、カサギの腕をつかんで、部屋から出ようとする。

「ま、待って、くれっ！ 理由くらい言ってからにしてくれないかっ！」

「タヴァト族が現れたのよ！」

「はい？」

カサギは話についていけずに、その場に踏ん張りながら首をかしげた。

「説明なんてまだるっこしいことしなくても、見てもらえばすぐよ。それでは、プロウウィンご夫妻、失礼いたします。お嬢様はすぐにお返しますので、どうかご心配なく」

「えっ、ちよっ……ああっ、いつ、行ってきまーす！」

カサギはずりずりと引きずられるようにして部屋から出た。夫妻はただあつけにとられて娘を見ていた。カサギは、混乱する頭を抱えて、夜の街路に飛び出すと、とにかくレイエネの後に続いて走り出した。

宮殿の地下牢。

現在ではまったく使われていないそこに、若い男がこちらを睨みながら、床に敷かれたぼろぼろの毛皮の上に座っている。

綺麗なひとだな、とカサギは思った。

カサギより一つか二つ年上だろう。端正な顔立ちで、アーモンド型をした、意志の強そうなすみれ色の瞳に、やや長めの、淡い色の金髪。肌はなめらかで白く、浅黒い肌で、黒髪黒眼の多い半島の間にはとても見えない。

昔読んだ文献に出てくる、半島よりさらに北西に住まう人々が、そんな姿だったらしい。

襟元に切れ込みの入った生成色のチュニツクを纏い、茶色いズボンを穿いている。腰には鮮やかな紅色の麻布が巻かれていた。飾り気はまるでなくても、とにかく綺麗な、とカサギは思って、青年に近づくと、その顔を凝視した。

すると、青年は、驚いたように目を見張り、カサギを見つめ返した。

「あんたは！……驚いたな。本当にいたとは……」

「私がどうかしたのか？」

カサギは青年の反応に戸惑い、訊ねた。が、青年は首を左右に振った。

「いや、こつちの話だ。今は関係ない。あんたの顔が、知ってるやつに似てたってだけさ……で、あんたは俺をどうしたいんだ？頼みを聞いてくれる気はあるのか？」

「頼みとはなんだ？ 私は来たばかりで、まだよく分かっていないんだ」

カサギは肩をすくめた。

現在、真つ暗で、焚かれているかがり火の明かりしかないそこにいるのは、カサギと青年の二人だけだった。

牢の入口には見張り兵がいるが、離れていて、存在は感じない。レイエネはというと、ファナラトを呼びに行ってしまったている。

「とりあえず、お前の名前は？」

「とりあえず、か……俺はイグザードだ。イグザード・ファソガム。年は十八で、出身はレナドゥ。見ての通りのタヴァト族だ」

「私はカサギだ。カサギ・プロウウィン。見た目とちがって十七歳だ」

「……別にそんな逃げ場をつくらなくても、そんなところには突っ込まないさ。俺はただ、頼みがあるから、遠路はるばるここまで来ただけだ」

青年、イグザードは、素っ気なく言った。カサギは、苦笑した。確かに、彼の言う通りだと思ったのだ。

よく分からないが、不思議と信用できる。言葉のひとつひとつに、真実が見える。そんな気がしたのだ。

「私は、考古学の教授の助手をしていたものだ。今は、タヴァト族と砂嵐の関連について調べている。近く、北へ旅立つ予定だったん

だが」

「だったら、手間が省けたな。

あの砂嵐は、俺たちの長の命令で、決して消えることなく吹き荒れ続けている」

イグザードの言葉に、カサギは驚愕した。

こつても簡単に肯定されてしまうとは、まったく思っていなかった。驚きの後、カサギの胸に押し寄せたのは、怒りだった。

「なぜだ、なぜそんなことを！ そのせいで、どれだけたくさんのひとが理不尽な暮らしを余儀なくされ、死んでいったと思っっているんだ！」

「ああ、だから、俺が来た」

イグザードは、迷いのない目で、射抜くようにカサギを見た。

カサギは、黙ってその顔を見つめ、嘆息し、訊ねた。

「どういう意味だ？」

「ここに俺が来たのは、あんたらの協力が必要だからだ。俺たちは長老たちのやり方には反対している。実は昔から反対派の集団はあったんだが、賛成派の方が人数が多くて、手出しができなかった。けど、今は違う。

かなりのタヴァト族たちが、反対派に回ってくれるようになった。フォシマヤ、サノツソが、俺を……俺を信じて、送り出してくれたから。

そこで、事情を説明して、最も力のある帝国に助力を請いにきたんだ」

「そうだったのか……だが、それをどうやって信用するかが問題だ。信用するのは、すごく楽なことだけれど、私たちは、お前をすくに信頼できない」

「信用なんかしてくれなくていい、けど、動いてみるに値することではある……だろ？」

イグザードの言に、カサギは少し思案して頷いた。

「そうだな。よし、私から色々と話してみよう。早くここを出して

カサギは一刻も早く家へ帰って頭を冷やしたくてたまらなかつたからだ。だから、ふたりに詳しい話などなにもせず宮殿から走り出した。

あんな男にみとれるなんて、と悔しげに呻きながら、カサギは夜の通りをひたすらに疾走した。

その途中、路上で小さな死骸をみつけた。薄汚れた布地にくるまれ、微かに腐敗臭が漂ってきている。まだ、生まれて間もない赤子のようだ。カサギはびくつとして立ち止まり、少し離れたところで街娼が客を呼ぼうと必死になっているのを見つけた。頭が一気に冷えた。

この子どもは、私だったかもしれない。あの街娼は、私だったかもしれない。

限られた物資を奪い合うがために、凄まじい貧富の差が生まれた。プロウウィン夫妻に拾われなかつたら、私は、こうやって死んでいったかもしれないのだ。

あの青年のことで、気軽に憤慨している場合ではない。

もしかしたら、この状況を脱するすべを知っている可能性を秘めているのだ。あの、憎い砂嵐を消してしまえるかもしれない可能性を、だ。カサギはふっ、と笑って、ゆつたりと歩きだした。

が、ふと目にした光景は、カサギにとっては悪夢そのものだった。ひどいショックで、体がふらつく。

そのせいで、家へ帰りつくまでに三回、転んでしまった。

第四章 人間の業

四 人間の業

なんだかすつきりしない天気だった。

まだ雨季は続くらしい。ありがたいが、旅立ちにはやや不向きだな、とカサギは思った。

生ぬるい風が吹きわたるそこは、帝都の東門だ。帝都は、堅牢な城壁に囲まれている。防衛のためと、砂の侵入をすこしでもふせぐためらしいが、あまり役には立っていない。

帝都は上から見下ろせば、浅い皿に四角い菓子が整然と並んだような様相を呈しているだろう、と義父が言っていたのを、カサギは思い出した。

うっかり早く来すぎてしまったため、いま、門のところにいるのは、カサギただ一人だった。ぼけっと空を眺め、雨季特有の、なんとなく重たそうな雲をながめる。

そうしていると、兵士らに囲まれたイグザードの姿が見えた。

カサギと大して違わない、全身のほとんどを覆う旅むきの服装をしている。違うのは、色くらいのものだろう。カサギは全体的に白を基調としているが、イグザードは、赤や青をかなり取り入れている。

カサギは、将来の暗雲をとりはらってくれる可能性のある美青年を見て、彼の言うことが本当だといいい、と思った。

実際、このあいだは、信じたのだ。

あの真剣さが演技だったとしたら、彼は一流の役者になれる。そう確信するくらいに、彼の言葉には、真摯さがみえた。

「よう、あのときは笑って悪かったな。べつに好きでドジなわけじゃないのにな」

イグザードは、神妙な表情で言った。カサギはそんなイグザード

を不思議そうにながめ、

「私も過剰な反応をしたと思う。が、なんだかそんな風だと印象がかわるな。もつとふざけた男かと思っていたぞ」

と、すこし意地悪そうに言った。

するとイグザードは、ふん、と鼻を鳴らして、不機嫌そうに眉根をよせた。

「傷ついているかと思ったんだが、取り越し苦労だったようだな」

「いや、結構傷ついたさ。けど、そんなことをいちいち気にするのはバカらしいから、やめにしたんだ。だから、お前も気にするな」

「ふうん」

「なんだ？」

意味ありげに微笑んだイグザードの真意が分からず、カサギはたじろいで訊ねた。

「なんでもない」

「なんでもないことはないだろう。言ってくれ」

「嫌だ」

イグザードは愉しそうに言うと、つい、と後ろを振り返った。

つられてカサギもそちらをみやると、レイエネとフアナラト、同行するらしい兵士が三人一緒に歩いてくるのが見えた。

カサギは、笑みを浮かべたままにいるイグザードを見やる。

こんな顔触れで、本当に大丈夫なんだろうか、と不安になったものの、カサギには逃げる気もやめる気もなかった。

行くしかないんだ。

そう自分に言い聞かせて、集まった面々と対峙した。

帝都を出て五日ほどたった。

現在カサギたちは、ハムリーズという村で、一夜の宿を借りたあと、再び出発しようとしていた。

ハムリーズは、小さな井戸を頼りに、乾燥に強いオリーブやヤシ、トウモロコシなどを育てて暮らしている、いたって穏やかで、のど

かな村だ。

サナラム半島には、山というものがほとんど存在しないため、遠くまで見渡せる。

決してやむことのない砂嵐も、ここから眺めることができる。帝都からは滅多に見ることができない。

砂嵐は、まるで城壁のようにそびえている。黄褐色で、時々黒い色の混ざる、うずまく嵐を見つめて、カサギは、あれは、もしかしたら、外の脅威から自分たちを守ってもいるのか、と考えたが、同時に、閉じ込めてもいる、と思った。

帝都にいるときは、フェケラム山の陰で見えないから、妙な気分だ。その山の恵みのお陰で、帝都は半島一豊かな水を得ることが出ているし、あれを常時見なくともすむ。

それは、とても幸運なことに感じられた。砂嵐を見ていると、心がささくれだつてくる。常に不安をおおるのだ。あの巨大な砂の壁は。

「……海路が使えるれば、こんな苦勞をせずともすむのにねえ」
村を見て歩きながら、レイエネが残念そうに言った。

「仕方ないよ。半島を取り巻く海には浅瀬が多くて船は出せないし、出せる場所には、うず潮があつて、危険なんだから」

カサギはそう答えて、村を見渡した。

今日はよく晴れていて、気持ちがいい。今は雨期であるため、水の心配はない。それで迷惑をかけることがなかったのは幸いだ。

カサギはそう考えて、ややこぢんまりとした、畑を眺める。

が、視界に、今にも倒れそうな老人や、壮年の女性、幼い子供や、女性をみつけて、目を疑った。

「レイエネ、あれ、なんであんなひとたちまで働いているんだ？」

「ああ、あれか」

レイエネは諦めにも似た様子で、疲れたようにカサギを見た。

「あれは、奴隷よ。奴隷という名前ではないけれど、同じようなものよ。彼らは、自分の抱えた借金を返せないから、働いて返すの。」

けれど、もらえるものはひどく少なくて、生活するだけで精いっぱいよ。

決して、借金は返せないから、一生、ああして過酷な労働に従事するの。もちろん、病気になっても、医者になんか見せてもらえないから、どんどん死んでいくわ」

「そんなっ!」

カサギは悲痛な声を上げた。

「何とかならないのか。」

もしかしたら、これも、あの砂嵐のせいなのか？ 物資が不足しているから、こんなふうにして、奪われるだけの人々が生まれてしまうのか」

「それは違うよ」

後ろから言ったのは、ファナラトだった。カサギは振り返って、怪訝そうにファナラトを見て、問うた。

「なら、なんでなんだ?」

「さあ、それは僕にも分らないよ。人間の業ってやつなんだろう。いくら物資があっても、ああいうことがなくなるとは思えない。人間は、そういうものだよ。」

それより、カサギはあそこにいる人たちをここから解放してあげたい?」

「そ、それはもちろん」

「ああいうことをなくせっていうなら無理だけど、彼らを解放するくらいなら、僕にだってなんとかなるよ。」

「やってみる?」

「トウニツトさん!」

レイエネが非難めいた表で叫ぶ。ファナラトは、それをやや皮肉っぽい笑みで受け流すと、くすくすと笑った。

「いいじゃないですか。例え一時的でも、自由を味わわせてあげるのも」

「あなた。それがどういふことなのか分かっていて、そういうこと

を言ったの?」

「反対ですか?　じゃあ、あれを見て見ぬふりしろってことですか?」

「それは……っ!」

レイエネは悔しそうに唸って、黙りこんでしまった。カサギには、ふたりがなにを言い合っているのかはよく分からなかったけれど、とにかく、あそこで殺されそうになっている人々を救うことができただけは、分かった。

「フアナラト、その方法を教えてくれ。私は、あのひとたちを、助けてあげたい。何もしてあげられないよりは、いいと思うんだ」

「了解」

フアナラトは、どことなく勝ち誇ったような笑みでレイエネを見て、カサギに言った。

「僕が思うに……」

石材をたっぷりと使って建てられた、巨大な屋敷。

さしずめ、草原に忽然と落ちた、巨鳥のフンのようだ。その建物は、ハムレーズ村を含む地域を所有する、地主の屋敷だった。

現在、カサギたちは、その屋敷の客間で、茶をふるまわれていた。客間にいるのは、地主と、その妻と、息子たちふたりに、使用人がひとり。カサギは、レイエネとふたりで、かれらの相手をしている。

(フアナラトお、うまくやってくれよ)

内心絶大な不安にさいなまれながら、カサギは笑顔を浮かべた。作り笑いには慣れてるし、他人が作った表情も見ぬけるから、交渉事には、カサギは最適なのだ。しかしいくらうまくやっても、フアナラトたちのほうがうまくいかなければ、水の泡である。

(こういう輩は、裏で絶対に不正をしているから、僕とイグザードでその証拠を探しだしてくるよ。)

カサギたちは、その間僕たちがしていることが見つからないように

気を引いていてね。と言っていたが、本当に大丈夫なんだろうか？

イグザードは心底嫌そうだったしな………)

笑顔で茶をすすりながら、カサギはそんなことを考えていた。

「それで、そのう、視察というのは一体いつまででしょう？」

地主が唐突に訊ねてきた。

カサギは、心のなかで嘲笑った。あからさまに罠に引っ掛かっている。それに、額に少しだけ脂汗が浮いている。

地主は肥え太って、綺麗に禿げあがった頭をしており、まるで太めの腸詰のようだと思った。隣に座す妻は、これ見よがしに金銀細工や貴石の細工物を身につけて、なぜだかつねに目の前に生ゴミでもあるかのような顔をしている。

見ただけで分かる。

こいつら、やっぱり不正をしている。

フアナラトの読みは当たっている。確信をもって、カサギは答えた。

「明日までになります。御迷惑でしょうが、よろしくご協力のほどを」

「は、はいはいはい。それはもうもちろんですとも、はっはっはっ」
台詞が棒読みだ。カサギは、腹を抱えて笑いだしたのをこらえて、なるべく優雅に見えるように茶をひとくち。

ふと、押し黙ったままのレイエネを見やる。彼女はむっとりとしたまま、茶にくちもつけず、美しい石材のテーブルを射抜こうとでもいうくらいの眼光で睨みつけていた。

地主は、そわそわとせわしなく視線を動かし、手を組んだりほどこいたりしている。

妻はじっとして動かない。

息子たちは、目の前の女ふたり、つまりカサギとレイエネを、物色でもするようにねっとりとした視線で見てる。

カサギは、客間に満ちてしまった沈黙を感じて、なにか言わないと気まずいな、と思い、口をひらこうとした。

その時だった。ばたん、と大きな音がして、室内にふたりの青年と、三人の兵士が入ってきた。

ふたりの腕には、羊皮紙がそれぞれ三巻きずつある。

カサギは思わず立ち上がって、じつとフアナラトの目を見た。カ
ーネリアンのように赤みを強めた瞳は、愉しそうにカサギを見返し
た。

見つけたのだ。と、カサギはすぐに確信した。

「不正の証拠がみつかりました。いかがいたしましたでしょうか？」

フアナラトはもったいぶって訊ねる。

カサギは、鷹揚に頷いてみせ、一気に冷たい光を帯びた空気をま
ととと、告げた。

「この家の者たちを、全員、帝国法に従って起訴いたします」

ややどんよりとした空模様の朝だった。

空気には湿り気が混じり、後でひと雨きそうな雰囲気である。あ
の後、領主の兵が到着したのは夜で、カサギたちは、地主の屋敷で
一夜を明かしたのだ。結局、地主とその家族は身分剥奪のうえ、帝
国からの追放処分が決定した。

「それじゃあ、後はお願いなね」

「はい。みなさんもどうかご無事で……」

一行に同行した兵士のうち、最も位の高い青年が頭を下げる。レ
イエネもまた、頭を下げて礼をする。

カサギも、その青年の前に進み出て、頭を下げた。

話し合いの末、彼にここですべてを任せることに決まったのだ。
色々と厄介事が残っているだろうが、彼は快く引き受けてくれた。
カサギは、そのありがたさに、心の底から感謝を伝えようと口を開
いた。

「本当に、迷惑なことを押しつけてすまない。私にもう少し力があ
れば、いや……言っても仕方ないのは分かっているが、それでも、
ありがとう」

「いえ。プロウウィンさんには調査があるので、いいのです。調査でもしも良い結果が得られるとしても、あなたが行かなければその判断もつかないかもしれない。僕の代わりはいますが、あなたの代わりはいないので、よ。」

「がんばってください」

「ああ、全力を尽くすよ。ありがとう」

カサギはそう礼を述べて、最後に握手をしようと、そこから立ち去る。

屋敷の前には、村から様子を見に来たのだろう村人たちがたむろしていた。カサギは晴れがましい気持ちで彼らを見た。

「が、かれらの表情はじつに険悪だった。」

カサギは、表情をこわばらせた。なぜ、彼らはある顔をしているのだろうか？

「どうしてくれんだ！ あの地主は、わしらが流民と知ってもなお土地に住まわせてくれたのに、まっとうな奴らが来たから、追い出されちまう！」

「わしらに死ねというのか！」

「えっ？」

カサギは、耳を疑った。

「彼らはただ、貧困の底にいたただけの人々ではなかったのか？」

「てめえなんか死んじまえ！」

「そうだそうだ！」

「この偽善者！ あんたのせいよ、あんたのせいで、あたしらはまた追い出されちまうんだよおっ！」

「すさまじい非難が、カサギに叩きつけられる。」

カサギは足がすくみ、動けなくなってしまう。すると、背後からイグザードが、ぽんと柔らかく背中を叩いてくれた。

「言わせておけばいい。どうせ、自分の力で現状を切り開いていく勇気もないようなやつらのたわ言だ」

「イグザードはそう言ったものの、カサギの足はすくんだままだ。」

「しかし、私は、彼らの生活の基盤を破壊してしまつた」
「ぬるいんだ。」

悪徳地主にすがるしか能のない奴らなんかにかけてやる慈悲はない
ぜ。大体、他の村人はこれでかなり楽になつた。

「見てみる、なにも言っていない奴らの顔をな。喜んでいるだろ？」
「言われて、カサギは人だかりの後ろの方にいる人々を見た。確かに、喜んで
いる。霧囲気に負けて何も言えないでいるようだけれど、確かに、こちらを見て頷いた。」

カサギは複雑な思いを飲み込んで、足を踏み出した。

間違つていない。

そうだ、私は間違つていない。

けれど、正しいことをしても、救われない人がいるのだ。むしろ、
窮地に陥つてしまつようなひともある。

難しい。

カサギは、非難の嵐を受けながら、静かに地主の屋敷を後にした。
(結局、すべてを救う方法なんて、ないんだ)

街道を行きながら、カサギはただただ、そのことを痛感していた。
そしてふと、疑問に思いながらも、その時には分からなかつたある
ことに思い至つた。

「レイエネ。私の提案に渋い顔をしたのは、このことを知つていた
からなのか？」

「知つていたわけではないわ。ただ、その可能性がありそうだった。
あたしにはわかるのよ。追い詰められたひとたちの、醜さも汚さも、
そういう道しか選べない悲しみもね。」

あなたは間違つていない。けれど、それが万人にとって正しいと
は限らないということが分かつたと思うの。

いい、経験だつたのよ」

「……………そう、だつたかな？」

「ええ。今度また同じことがあつても、あなたには選べる道が増え
ている。」

迷えるから。迷えるのは、きっと、優しいからよ。

あなたはひとつ、優しさを手に入れたのよ」

レイエネは穏やかに微笑んでそう言うと、後はひとつとも口をきかなかつた。

カサギは、言われたことを何度も反芻して、心に焼きつけようと思つた。

絶対に、忘れてはいけない言葉だと、感じたからだ。

第五章 トウノーレ

五 トウノーレ

空には輝く火をまき散らしたような星が輝いている。

カサギたちは、目的地であるレナドウの一つ手前にある町、エツジウエアにようやくたどり着いて、途方に暮れた。

というのも、すでにとつぷりと夜も暮れて、どこの宿も閉まってしまっていたからである。

「困ったな。どうしよう」

つぶやいて、カサギは溜息をつく。

「困ることなんかないぜ。もともと、宿をとる気なんかない。俺の知り合いの家に用があるんだ。そいつの話も聞きたいし、今夜はそいつの家に泊まらせてもらおうぜ」

イグザードは軽快に言った。

「あら、いいの？ あたしたち結構大所帯よ？」

レイエネが苦笑気味に問うと、イグザードは、少し困ったような顔をした。

「それなんだがな、実は、頼みがある」

「なに？」

「俺の知り合いに話を聞いた後で、あんなたちの兵士には、帝都へ戻ってもらいたい。聞いた話を伝えるのと、軍を派遣できるかどうか、聞いてきて欲しいんだ」

「なぜそんな必要があるの？」

「話を聞いてみればわかる」

イグザードは、そう素っ気なく言うと、歩き出した。

エツジウエアは夜でも解放されている珍しい街だ。もともと、宿場町として栄えた場所であるため、城壁などはない。夜間も見張りの警備兵はいるが、基本的に、よほど怪しくない限りは、出入り自

由だ。

現在でも、北との交易の拠点として栄えている。

北では貴重な木材や香辛料、塩などがとれるため、商人の行き来はかなり多い。南部では植物性のものはごく貴重だから、閉鎖的な北の民族も、商取引だけは活発に行う。

どんなになつても、お金と物は欲しいものらしい。

「ああ。それから、俺がタヴァト族だつてことは秘密にな」

不意に足をとめて、イグザードは言った。

「なんでだ？」

カサギは理由が分からずに訊ねた。

「そりゃ、俺たちはこの人たちにとつては盗賊団もいいところだからさ。物資の移動を妨げるために、商人を襲うこともしている」

「ど、どうしてだ！」

「帝都がこれ以上豊かになつて、文明が進歩するのをとどめるため、と言っていた。俺にはどうして進歩を止めなきゃならないのか、理解できないけれどな。ただ、ひとは余計なものをどうしてもつくりだしてしまう、自然の摂理からはずれている、だから、管理が必要なんだとか長老が言つてたよ。

だから、ここの連中には恨まれてる。

と、いうわけで、俺のことは内密にな」

「あ、ああ、分かった。みんなも、分かったよな？」

カサギの問いに、全員が頷いた。それを見て、イグザードはあきらかに安堵したように嘆息して、ふたたび歩みを再開した。

夜も更けているというのに、街中にはかがり火が焚かれ、酒場や、娼館や、賭場などいかがわしい店がにぎわっている。

大通りはさすがに静かなものだが、通りを少しでも外れれば、すぐにそういう路地に行きあたる。遊んでいるのはもっぱら商人たちで、なかには職人もすこしまじっている。ああして、日々の憂さを晴らしているんだな、とカサギは、年頃の女の子としてはちよっと複雑な気分でイグザードの後ろについて歩いた。

道は質素で、石畳が敷かれ、きつちりと区切られた帝都とはかなり異なり、地面を踏み固めただけで、馬車の轍の跡や足跡だらけの道は適当で、どこからが道路で、どこからが誰の敷地なのかさっぱりわからない。

しかも、かなり複雑に入り組んでいるようだ。

イグザードがいなければ、迷っていた可能性も高い。

やがて、細い路地に入り、少し進むと、イグザードは一軒の、ふるぼけて至るところが壊れている家の前で立ち止まった。入口はポロポロの木戸。イグザードはそこを三回叩いてしばらく待って、応答がないともう一度三回叩いた。

すると、木戸が開き、なかからしなやかな体躯の女性が現れた。寝ていたらしく、不機嫌そうに眼をこすって、眉間にしわを寄せている。

「よう、トウノーレ。少しの間厄介になり来たぜ」

「こんな夜更けに来ていきなりね。まったく、あなたらしいわ……仕方ないか、入って。歓迎は出来かねるけれどね」

「ややつつけんどんに、ハスキーな声音で、女性、トウノーレは言った。」

夜着だというのに、鮮やかなやや褐色がかった赤の服をまとっている。髪は明るい金色で、瞳は黒味の強い青色だ。

艶やかで、色っぽくて、カサギが一生かかっても手に出来ない美貌を、さらりと引き立てている。

羨ましい。

そんなことを思いつつ、家のなかへと足を踏み入れる。

なかはひどく寒々しく、たったひとつの、石積みのあるところが欠けている暖炉で燃える炎だけが、ぬくもりを感じさせてくれた。

「なんだか、寂しい部屋だな」

カサギはぼつりとつぶやいて、目を細めて部屋を見た。ひとが住んでいるというのに、生活のあたたかみがない。床に投げ出された衣類と、ナイフや長剣が何本かだけが、唯一トウノーレの日常を刻

んでいた。

床は土間で、わらが薄く積もっている。

それ以外には、石材で作られたテーブルと、木製の椅子がひとつに寝台がふたつ、持ち物を入れておくための長櫃がひとつだけで、がらんとしている。部屋の広さはそこそこあるのに、家具がたったそれだけなので、カサギはトウノーレがどういう人間なのか、まったく理解できなかった。

「昔からこうなんだ。どうやったって、普通の人間だったら、こうはいかない。だから、こいつがここにいるんだ」

そんなカサギの様子に気づいたのか、イグザードが言った。

「……………つまり、作業員か、諜報員ってことね」

レイエネが苦々しい様子で言った。

カサギは、何となく納得してしまった。

「とにかく、あたしに何の用なのか教えてちょうだい」

「だから、厄介になりしてきた。ついでにもう一つ、現在のレナドゥ、どうなってる？」

イグザードが訊ねると、トウノーレは一つしかない椅子に腰かけて、笑った。

「完全に割れたわよ。どうするつもりなのかしら？　ねえ、イグザード。返答次第ではあたし、あなたたちをここで殺さなければならぬわ」

「そりゃ物騒だ。大丈夫さ……………俺は、まだ死にたくないし、長老たちのことも嫌いなわけじゃない。こいつらはただ、知りたいだけのやつらだ。」

もう、教えてやってもいい頃合いだろう。

それに、俺にも知らないことが多すぎる。教えてやってほしいんだ、色々とな」

「そう、そうね。もう、知ってもいいかしら。どのみち、もう最終段階にはいるのだから。知ったところで、何もできやしないわよね」
フフフ、と笑って、トウノーレはわらの積まれた床の上を指差し

た。

「立ち話もなんだから座って。この主はあたしだから、この椅子には座らせてあげられないけれど、作り置きのスープくらいはご馳走するから、そこで好きなようにして。」

それから、話をしてあげる。

この、夜のうちにね」

トウノーレはそう言うと、立ち上がってテーブルから大きな鍋をとると、暖炉の自在鉤に吊り下げた。少しして、いい匂いが部屋に満ちる。

黙ってふたりの様子を見つめていたカサギやファナラト、レイエネと兵士たちは、なんともいえない空気に、口を閉じて耐えていた。（なんか、昔の恋人同士の会話みたいだな）

夜の酒場でよく見た光景を思い出しつつ、カサギはこっそりとため息をついた。

「なんだか、もやもやする。気に入らない。なんでなんだろう。カサギは不機嫌を隠すのがへたくそだった。むつつりしたまま、イグザードを睨みつける。」

と、イグザードが振り向いて、すまないというふうには微笑んだ。それで、なぜかますますカサギはいらついたが、そこは押さえて、黙ってふるまわれたスープをすすり、食後にはきちんと礼も言った。味は、うまくもなければ、まずくもなかった。

トウノーレは、全員がひと心地ついたのをみてとると、ようやく口を開く。

「あたしたちタヴァト族は、ここにもともと住んでいた者ではなく、大陸、つまり半島よりずっと北出身の民族なの。」

そこでは、ただひたすら戦乱が続いていてね、大勢の罪もないひとびとが毎日のように死んでいったの。

超常の力をあやつるすべを心得ていたあたしたちの祖先は、その力でもって戦乱の地から逃げ伸びて、この半島を安住の地と定めて住みついた。

信じられないかもしれないから、見せてあげるわね」

トウノーレはそう言うと、地面に向かって手をかざした。すると、地面の上に積もっていたほこりが、竜巻状に巻きあげられ、風がそこにいた全員の頬をたたいた。

カサギは、ただただ呆気にとられるばかりだった。こんなことのできる人間がいるとは、全然思ってもみなかったのだ。

「……………けれど、ここにも争いの火種はあった。そこで、大陸と断絶させることで、団結力を手に入れられないかと考えたのよ。分かる？」

それは画期的で、大陸から攻め入られることもなく、超常の現象によってひとはおびえて、まとまるようになっていった。

争いが、ほとんどなくなったの。盗賊とか、時折起こる反乱をのぞいて。一時的に。

でも、やっぱり戦争は起こった。国が生まれたのがその証よ。そこで、ここをひどく恵まれない土地に改造したの。それこそ、奪い合うことで滅びの道を辿ればいいと思って。

もうその頃には、祖先も年老いて、人に絶望していた。

けれど、寿命には勝てなくて、あるものを作ったの。

祖先は、あたしたちにそれを残した。後世を生きる中で、もしも、ひとが愚かな行いを改めなかったのなら、その時は、超常現象を作りだす装置を全開放にして、半島の人をすべて滅ぼせと。

いままさに、その時なの。国は腐り、ひとが減り始めた。もう、お終いな。

そしてあたしは、その考えに賛成している。

だから、あなたたちの教授を殺したのよ」

トウノーレが一旦言葉を切り、カサギとファナラトを、濃い青の瞳で見つめる。カサギは、挑発されているような気がして、トウノーレを睨みつけた。

だが、言葉は発しない。それを見て、トウノーレは微笑し、語りを再開した。

「邪魔しようとするのだから……生かしておくわけにはいかなかったの。あと、少しなのだから……」。

たとえこの手を汚してでも、あたしは計画を死守するわ。生きてきたなかで学んで、考えて傷ついて、そして選んでつかんだ答え。決して、誰にだって、邪魔なんかさせない。それがあたしの決意よ。

あなたたちは、どうなの？」

なめらかに、優雅に、よどみなく、つらつらと語られた衝撃の真実に、誰もが言葉を失っていた。

俄かに信じられる内容の話ではない。

しかも、あの時すれ違った女が、トゥノーレだったとは。

あの赤と白の模様は、布の白と、教授の血の、赤だったのだ。目の前に、仇がいる。そう思うと、どす黒い憎しみが心を支配する。

全身全霊が、トゥノーレを殺したい、と叫ぶ。

が、カサギは、わらのこびりついた手を震わせて、ぎりっ、と歯を食いしばる。

「そんなことは間違っている！　ひとは、そんなものじゃない！」

叫んで、怒りを閃かせた金色の瞳でトゥノーレを睨む。

が、トゥノーレは涼しげに受け流し、赤い唇を笑みにつりあげて言う。

「ひとはそんなものよ。お嬢ちゃん……貴族出身の、甘えた世界で生きてきた目でなにを見たかは知らないけれど、それが、ひとよ。歴史が言っているの」

「私はもともと孤児だ！　地獄なら嫌というほど見た！」

カサギは喚いた。立ち上がって、拳をにぎり、全身で叫ぶ。

その言葉に、その場の全員がびっくりしたようにカサギを見た。トゥノーレも、驚いたように息をのむ。一見すると、カサギは良家の息女だった。矜持も高く、品もある。しかし、それは見た目だけのことだった。カサギが努力してつくりあげた、仮面だった。

「私の両親は互いに殺しあって死んだ。孤児院で一緒だったものた

ちも、理不尽な理由でその九割が死んだ。だがそれは、お前たちがここを閉鎖したからだ。世界は、このひとたちは、お前たちの玩具じゃないんだ。

なぜ、あんないい人たちが、あんな目にあわなければならない！生きて行くのに必要なものが手に入らなくて、奪い合うしかない。底辺で、血を吐いてそれでも、そのことを悲しんで、あがきながら生きているんだ！

お前たちは魔神だ！ひとを食らう、絶望で人を食らう魔神だつ！

振り絞るように怒鳴り、カサギは木戸にぶつかると走りだし、外へと飛び出した。

真実の残酷さに、焼けつくような怒りが迸る。くだらない。くだらない理由で、死んでいった人たちを思いながら、カサギは走った。

しばらく走ると、街の外に出ていた。

足もとは不毛の荒野だ。草一本見当たらないけれど、そこでは小さな生き物が必死に暮らしている。生きるためだけに、持てるすべてを捧げている。

いまは見えなくとも、いのちは息づいている。

カサギは、大きく息をついて、へたりこんだ。

冷たい風が頬をなでる。頭がすこし冷えると、今度は冷たい決意が心を支配した。

トウノーレは言っていた。

ひとびとを全滅させる装置がある、と。そんなもの、この私が、ぶっこわしてやる。なにを犠牲にしても、そいつは壊さなくてはならない。

絶対に。

そう考えていると、後ろから足音が聞こえた。カサギは、はっ、として涙を袖で乱暴にぬぐうと、振り向いた。

「イグザード？」

「こんなところにいたのか。まあ、気持ちは分かるぜ。俺だって、滅茶苦茶腹が立ってるんだ。少し前までは、俺もなにも知らなかったんだ。二カ月ほど前に、父に教えられて、悔いはないかと訊かれた。驚いたぜ。」

人間の滅亡だ。悪夢だよ。俺は、放っておいたらまずい、と思った」「帝都に来たのは、そのためだったのか」

「ああ」

イグザードは頷いて、へたりこんだカサギの隣に腰を下ろした。

「あんなに激昂するとは思わなかった。それに、孤児だったそうだな。しかも、両親が殺しあっただなんて……。とても、そんな過去を抱えている風には見えなかった」

「みなそう言う。本当は、そんなこと言うつもりはなかったんだ。」

だけど、黙っていられなかった。私は、見てきたんだ。この目でどれだけみんなが苦しんでいるのかを。

だというのに、そのひとたちは私を助けてくれたんだ。気の毒だと言って、自分たちだって気の毒なものにな……。

だから、許せなかった。私たちは、まるで飼われたアリだ。狭いところに閉じ込められて、巣を作って、必死で生きて、死んで、また生まれて、生きてきた。管理されてることも見張られていることにも気付かないで、勝手な理由で全滅させられようとしているんだ」力をこめて、怒りと憎しみをこめて、カサギは言葉をつらねた。すると、横のイグザードがちいさく嘆息した。

「うまいこというなあ。飼われたアリ、か。確かに、そうだな……。そして、俺は飼い主の側の人間だ」

「イグザード？」

「知らなかった。それはただの言い訳だ。俺はそれを聞かされてからずっと、眠れなくなった。毎日毎日、朝が来るのが怖かった。

死のうと思ったこともある。朝起きるたびに、無数の屍の上に生かされている自分の身を呪ったよ。」

一生、加害者になって生きるのかと思うと、恐怖だった。

こんなのは間違つてると、ある日確信した。他にも、そういう考
えの奴らを見つけたときには道が開けたようだった」

「…………それは」

「俺はそいつらを代表して帝都に乗り込んだんだ。誰でもいい、信
じてくれるやつを見つけて、協力してもらつたために。そうしないと、
取り返しがつかなくなるからだ」

イグザードはふつと微笑んで、まっすぐにカサギを見つめた。穏
やかで、喜びにあふれたあたたかい紫の花びらのような瞳で。

「嬉しかったよ。あんたは信じてくれた。ここまで一緒に来てくれ
た。けど、足りない。軍が来るぐらいでなけりゃ、長老たちは止め
られない。」

だから、あいつに会わせた。

トウノーレは、長老の孫だ。最も過激な、滅亡の支持者でもある。
あいつの言葉だったら、真実味があると思つた。

まあ、ここまで激昂するとは、予想外だったけどな」

「あ…………いや、私の生きてきた道が、そうさせたんだろうなと思
うけど、正直私も驚いている。こんなに怒つたこと、あまりないか
ら」

カサギは恥ずかしさを覚えて、それを隠そうと笑つてみた。

「ありがとう」

不意に言われた言葉のあと、気がついたら抱きしめられていた。
カサギは固まってしまった。予想外だ。けれど、不思議と嬉しかつ
た。

まだ知りあつて、ほとんど日は経っていないが、なぜか一緒にい
ると落ち付いた。

この気分がなんなのかは分からないが、今は、一緒にがんばろう。
「うん、一緒に、がんばろうな」

言つて、シヨックですこししびれた腕をあげて、イグザードの背
中に手をあてる。あたたかかった。家族、というものがもしいたの
なら、こんなふうに温かかっただろうか？

そんなことを考えながら、ふたりはしばらくそのままだった。

少しして、イグザードがふと、口を開いた。

「あの話のとき、あんたは気づかなかつただろうけど、あのファナラトとかいうやつの様子がすこし変だったぞ？ あいつもなにか、このことに思うところがあるのか？」

カサギは、身体を離して、イグザードと向き合つと、首を横に振つた。

「いや、私は知らない。あいつとのつきあいは長いけど、絶対に本心はさらさないやつだ。見えてしまいそうになると、すぐに茶化す。だから、私はあまりあいつを知らない。けど、ここに来る前、あいつ言っていたんだ。人間なんか滅ぶなら滅べばいい、所詮は、血と肉の詰まった皮膚だって。あんなに穏やかなやつからあんなに過激な言葉がでてくるなんて、驚いたから、おぼえている。」

多分、トウニツトの家でなにかあつたんだろうな、と思つて「そこで一旦口を閉じて、息をつく。」

「あいつ、後妻に殺されそうになったことがあつて、その後妻は投獄されたけど、今の後妻ともうまくいってないらしい。」

トウニツト家は、大貴族なんだ。皇帝一族の血に連なる。血が絶えれば、皇帝を排出することもある血筋で、当主争いは凄まじいらしい。あいつは、長男だけど、そんなものいらなうと言って、放棄して弟にゆずつたらしい。でも、信用されてないらしい。私は、今の後妻が悪い人とは思えないんだ、優しく、厳しくて、いい人なんだ……私のこと、褒めてくれて、婚約者にされそうになったよ。孤児の、私をな……だから、なにかあるとしたら、殺されそうになったことだと思う」

「そうか」

イグザードは、少し唸つて、言った。

「気をつけてやった方がいいかもしれないな……ところで、婚約者つて」

「え？」

カサギはイグザードがなにをいいたいのか読めずに、首をかしげた。

その時、町のほうで、大声があがった。

風に乗って、かすかに響く怒号は、言っていた。

「タヴァト族を見つけたぞ！」

カサギは、イグザードを見た。彼はここにいる。ここには、ふたりしかいない。つまり、見つかったタヴァト族とは、トウノーレ！

「行こう！」

「ああ！」

頷きあい、ふたりは町の方へ駆け出した。

第六章 レナドゥ

六 レナドゥ

カサギとイグザードが広場にたどりついたときには、トゥノーレはもう虫の息だった。

いつもであれば閑散としている広場には、手に手に松明を掲げた男たち、なかには女たちも少し混じり、好奇心に負けて、親に折檻されるのを覚悟で出てきた子どもたちもいる。

「おれたちの商品を奪う悪党め！」

「血祭りに上げる！」

「見せしめだ！」

飛び交う怒号と、振り下ろされるこん棒。トゥノーレは血まみれで、顔は原型の美しさをまったくどめていない。

「そこまでだ！」

そこに、割り込んだ女の声。カサギは帝国旗をはためかせた槍を持つ、レイエネの姿に思わずほっとした。

巻き込まれて、勘違いされて、襲われていたらどうしようかと考えていたのだ。

それに、トゥノーレをそのまま見殺しにするのは嫌だった。

「後は我々にまかせ……………」

「うるせえ、どけっ！」

民衆のひとりが、レイエネを突き飛ばした。慌ててつき従う兵士二人が支える。

止められない。

レイエネの茫然とした様子を見て、カサギは唇を結んだ。

鈍く、重く、湿った音が響く。ここまで、ひとはひとを憎めるものなのだ。カサギは、咄嗟にイグザードの鮮やかな金髪を隠すことを思いついて良かった、と思った。街に入る前、カサギは手持ちの

布で、完全にイグザードの頭を覆ったのだ。目だけはどうしようもないが、北部人には瞳の色が深い青だったり、緑だったりする者もいるので、ごまかせるが、明るい金の髪は、タヴァト族特有のものなのだ。

「なんでっ、こんなこと」

呻いて、すくんだ足を見やる。

本当は、あのなかに飛び込んで行って、こんなことしても駄目だと叫びたい。無意味なんだと、これは一方的な虐殺だと言いたい。けれど、怖い。怖くて、たまらない。

動いてくれない体と、出ない声。

カサギは立ちすくんでいるしか出来なかった。

「……………っ、ハハハハハッ、あたしを殺したとてもう遅いさ！ どうせみんな砂嵐で死ぬんだよ！ 先に行つて、地獄を見てきてやるさ！」

アハハハハッ、グッ、ああっ！」

「黙れ、死ね！」

「ナア、ルマヴレっ！ あたしの……………願い」

トウノーレはひととき大きな声で叫ぶと、ぱたりと倒れて、もう動かない。しかし、それでも彼女の体は打ち続けられる。

「お前のせいで、俺の母は死んだんだっ！ 薬が間に合わなかったんだ！」

「そうだ。おれの妻も、栄養失調で、死んだ！」

「私の赤ちゃんも、産めなかった！」

「お前の、おまえらのせいで、店がつぶれたっ！ 領主に見限られた！」

口々にほとばしる怨嗟の叫びは、夜が明けるまで続いた。

カサギは泣いていた。

ただ、それしか出来なかった。イグザードは側にいてくれた。本当は、彼が一番怖かっただろう。カサギは、悔しくて、泣いた。

泣きじゃくった。

町からの出立は、その翌日となった。

町長や、職人頭、商人たちの元締めらに、なぜあのタヴァト族と一緒だったのか質問され、目的を問われたためだ。

話が終わると、カサギたちは歓迎を受けた。

イグザードは道案内の北部人だと紹介された。意外にも、疑うものはいなかった。

そして、出立の日、カサギたちは支援金という名目で寄付されたお金や物資を、押しつけられた。拒絶しようとしても押しつけられるので、仕方なく受け取った。

「どうか、あの砂嵐をなんとかしてください」

「わしらの生活を守ってください」

「うまくいきますように、お祈りしています」

見送りの時に、民衆からはそんな言葉が掛けられた。

町の入口にさしかかると、今まで随行してくれた兵士二人との別れが待っていた。彼らには、帝都まで軍を呼びに行ってもらうのだ。

「それでは、必ずこの危機を救うために、軍を連れてまいります」

「レイエネさん、ひとりで大変でしょうが、がんばってください」

「ええ、全力を尽くすわ」

レイエネは、兵士二人とそれぞれ握手して、微笑んだ。

「カサギ隊長も、がんばってください」

「あ、ああ」

「かつこよかったですよ。あのトゥノーレってひとに怒鳴った隊長」

「そんなことないさ。お前たちも、気をつけてな。無事に、帝都を目指してくれ」

「はい」

兵士二人は、意気揚々と町を出て、帝都への旅路についた。忙しい旅になるだろう。だが、どうか無事で、とカサギは祈りをこめて彼らの背中を見つめた。

その背が見えなくなつて、カサギたちもまた、新たな道を歩み始

める。今まで以上に、辛いことが待っているような、そんな気がした。

重くなった背中を丸めて、カサギはつぶやいた。

「結局、トウノーレさんの遺体を葬ることもできなかったな」

「仕方ないさ。それだけ、憎しみの力は強いんだよ」

フアナラトが悲しげに微笑んだ。

「タヴァト族なんか、二度と蘇るなってことだよ………僕たちは、いつかの後世には復活するんだ。体は、容れものだから、なくしてしまえば、もう戻れない」

「私は、復活なんて信じてないよ。信じたくない。いまだけだ、私がかここに在るのは、よみがえったとしたら、それは別人さ」

カサギはさらり、と不敬なことを言うと、空を見る。

晴れている。乾季が近いのだ。

雲すらない空は、なんだか乾いていて、暑く、厳しいように思えた。

最終目的地のレナドゥ。

カサギたちは、夜通し街道を進み、昼少し前に、そこに辿りついた。

そこは、色彩にあふれた場所だった。南部の町は、ほとんどが、帝都でさえも、色彩に乏しいというのに、そこには極彩色があふれている。

どの国の支配をもうけない集落は、思っていたよりは小さかった。けれど、張り巡らされた外壁は高く、頑強そうなつくりだ。現在では、物資が足りなくて、大規模な戦争などは起こり得ないため、主に盗賊よけに使われているのだろう。

内部の家屋は、南部と異なり、密集せず、少し離して建てられている。家と家との間がないことの多い南部の家しか知らないカサギにとって、それはじつに珍しい光景だった。

緑が豊かで、花が咲きみだれ、動物が暮らす。

豊かな色彩をもつ、そこは異色の町だった。

「ここが、レナドウ……………」

町の入口近くで、カサギは感嘆のため息を漏らした。

南部の町では、色布などでなんとか賑やかに彩りを与えていたものが、ここではそんなものがまったくいらぬ。

それに、なんて日差しが柔らかくて、優しいのだろう。

空は晴れており、薄っぺらい感じの雲が浮かんで流れている。

足をさらに前へ出そうとしたカサギは、肩をイグザードにつかまれ、止められた。

「どうかしたのか？」

「何か、嫌な感じがする……………」

イグザードは、前方に広がる、木造の家屋が並ぶ町を睨んで、喉を鳴らした。カサギは、その様子に、不安を覚えた。

家屋を守るように張り巡らされた石壁。その石壁の裂け目のような門のところに、複数の人影が見えた。心臓が早鐘をうつ。走ってくる。

全員金の髪をしている。

体は、革の鎧でかためられ、手には剣や、槍、珍しいところでは斧をもっている者もあり、カサギは背中を冷たい汗が伝うのを感じた。

皇太子の軍を呼ぶために、エツジウエアの街で、兵士二人と別れている。

ひとりでも良かったのだが、彼らの安全を考えると、そうはいかなかった。いまのカサギたちは、圧倒的に不利だ。

どうしたらいいのか、分からないでいるうちに、囲まれてしまう。

「イグザード、やはり、裏切ったな」

囲む輪から一歩前へ踏み出してきた、貫禄のある壮年の男性が言う。

「なぜそうなる？ 俺やこいつらが、なぜあなたたちに脅威を与えられると思うんだ？ あなたたちのほうが、よほど物騒じゃないか。

俺たちは、話し合いをしにきただけだぞ」

「帝国兵を連れてきておいて、よく言うわ。おい、捕らえて、投獄しろ」

「お、おい！ 話すら聞かないで……ぐあっ！」

必死に話をしようと声を荒げたイグザードを、壮年の男性が殴り飛ばす。イグザードは軽くよろめいて、地に尻をついた。

「イグザード！」

カサギは思わず悲鳴を上げる。

イグザードは、大丈夫だ、と言いたげに笑って見せたが、それもほんの一瞬のことだった。

カサギたちは、全員捕らえられ、後ろ手に縛られると、レナドウの警備隊詰所にある牢へと連行されてしまった。

冷たいむき出しの土のうえに、レイエネと共に放り出されて鍵をかけられると、カサギは途方に暮れるしかなかった。

第七章 悲しみのタヴァト族

七 悲しみのタヴァト族

「食事だ」

少しうとうとしていると、つつけんどんな声がした。カサギは目を開いて、立ち去りかけていた青年に向かって叫んだ。

「待って、待ってくれ！ お願いだ、せめて話だけはさせてくれ。

殺されたってかまわないが、せめて、理由くらい教えてほしい！」

カサギは、鉄格子にしがみついて、全身で訴える。

「…………そのうち、最長老様がいらっしやる。待っている」

「え」

カサギは、あっさりと肯定され、虚を突かれてぽかんとした。

やがて、木のきしむ音がし、戸が閉められたのが分かる。足音が少しずつ遠ざかっていく。

「ふう、無愛想なことだな。まあ、囚人だし、愛想良くされたらされたで気色が悪いか」

つぶやいて、置かれた食物を眺める。

あまり、なじみのないものが、木のトレイに置かれている。

なにより、緑色だった。緑色した豆のスープ。パンにもなにか緑が練りこんである。なんの草だろう、と思いつつ、手にとって、口へ運ぶ。

（まあ、毒ではないだろうしな）

食べてみて、薬草のような風味だな、と思いつつ咀嚼する。たぶん、薬草なのだろう。

木のポウルに注がれた水で、その独特な風味のぼそぼそパンを流し込み、後ろで横になっているレイエネを見やる。

彼女は、ここにいれられてすぐに、微熱を出して寝込んでいる。

一応、体の下にはワラが敷かれているが、本当なら、ベッドで静養

させたかった。

カサギはスーパの腕を持ち、レイエネのそばへにじり寄る。

「レイエネ、水分は取っておいた方がいい」

「え、ええ。ごめんなさい」

レイエネは辛そうに掠れた声で言うと、起き上がって、腕を手にした。カサギはその背中を支えながら、パンをかじる。レイエネは、中身を少しずつすすると、軽く咳をした。

「大丈夫なのか？」

「ええ、ごめんなさい。あたし、こういうところに弱くて……ずっと、小さい時はずっとこういうところにいたの。だから、反射的に、体が、心が拒絶してしまうみたい」

「ずっと？」

カサギは不思議そうに問うと、まさか、と思った。

「あのときの、北部人狩りのときに……か」

「そうよ。悲惨だったわ、あたしは押入れに押し込められて、たった一枚の板の向こうで上がる、家族の悲鳴を聞いているしかなかった。あたしはまだ、小さくて、弱かった」

独白めいて、レイエネはつぶやいた。

じつと、濃い青色の瞳で、立ち昇る湯気を見つめている。イグザードのものと似た、けれど決定的に違う、暗黒を宿した青い瞳。夜明けの群青色。

カサギは、そのあまりの寂しさに、下を向く。

見ていられなかった。

早く、こんなところから出してあげたい。

（私は、無力だ。

もっと、いい考えが浮かぶ頭が欲しい。それを、実行できる行動力をともなつた体が欲しい！ こんなに小さくて弱くては、何もできないじゃないか）

心のなかで叫ぶと、かつて目にした虐殺の風景が脳裏をよぎる。

（考える。なにがなんでも、レイエネを守るんだ）

そんなことを考えていると、金属がぶつかる軽くて涼やかな音がした。続いて、戸がきしむ音。誰かが入ってきたらしい。

カサギは、決然とした表情で入ってきた人物を見た。すぐにわかった。

にじむ貫禄と、立派な体躯。まとう衣は裾が長く、ついている杖は丈夫で使い込まれて、美しく、金色の装飾がなされていた。

白くなった髪は長く、腰まである。額には金のサークレットがまっていた。

「最長老様ですか」

「いかにも」

「私と、話をしに来てくださったのですか」

「否……ただ、一方的に告げに来たのみだ、若き雌獅子よ。良い目をしておるが、はたしてそなたのような人間がどれほどいるだろう？

そしてその煌めきが腐り落ちないとも限らない。

話し合いなど無駄だ。我らは、長年つみあげてきたものを見た結果、すべてに災禍を下すと判断したのだ。

それが、悲劇を見なくて済む、唯一の方法なのだ」

冷たくて細い、冷え切った銀灰色の瞳が、カサギを睥睨している。カサギは、夜明けにも似た金色の大きな瞳で、その銀灰色を睨み返した。

「知っておるか？ 我らの記録に残っている、醜きひとの行いを。

彼らは歴史から学ぶことをせず、その時々自身の自身らの状況しか見ておらぬ。

狭い視野で、自身の成功のみを追い求め、他者を食い尽くし、改造し、従え、自然ですら管理下に置けると勘違いした。

小さな神を気取って、おなじように生きるすべてを踏みにじってきた。

そして、いままた、ここでも繰り返された。

物資を制限しても、ひとはそれを分け合い、暮らしていくことができなかつた。質素に、求めず、急がず、理解に努めていれば、自

身だけが肥えることを喜ばなければ、わしらとて、希望を持って、ナルマヴレを破壊できた。

だが、そうはならず、見てみよ、その北部人を。

ささいな理由で、ひとはひとをごみくずのように扱った。戻れないのじゃ、黎明の娘」

「本当に、もう、なにもないのか？ ひとには、なにも残っていないのか？

私は、そう思っていないのだがな」

カサギは、目一杯強がつて、笑って見せた。

すると、長老はふつと顔をほころばせ、目じりを下げた。

「よい娘だ。さすがは、黎明の娘だ」

「……………黎明の、娘？」

「いや、気にするな。もう、それにも意味はない。予言が成ったとはいえ、わしらはひかぬのじゃ……………いずれは尽きる命。しばらくしたらそこからだしてやるう。」

そしてその目で、ひとの終焉を見て、滅ぶとよい」

長老はそう言うと、静かに目を閉じて、ゆっくりと退出していった。

カサギは呼びとめなかった。心が、ひどく冷えて、しびれていた。長老の言ったことは、知っている。帝都で、どれほどそれらの本を読み漁ったか。

けれど、カサギは希望を捨てていなかった。

希望がない、なんてことはない！

振り向いて、レイエネと、手元のスープを見やる。すっかり冷めてしまったその汁だって、温めなおせば、また美味しくなる。

取り戻せないものなんかない。

だから……………。

「レイエネ、絶対に、私は諦めたりしない」

そう言っつて、握っていたパンを一度に口に詰め込んで、必死に咀嚼した。そうだと、私はまだ生きているのだから、最後まで、あ

がくんだ。

「カサギ、カサギっ」

ささやき声がする。カサギは唸って、目を開ける。外から冷え冷えとした月光が差し込んでいて、かなり明るい。夜なのか、と思うと、目の前に、妙にきれいなものが見えた。すごく綺麗な、男の顔だ。

「……………イグザード？」

一気に目が覚めた。

「どうして？」

「助けにきた。いま、ここから出してやる……………ところで、彼女はどっしたんだ」

「あ、ああ。過去に経験した辛いことを思い出してしまったらしい、そのせいで、熱が出てしまったんだ。はやく、ここから出して、休ませてあげないと」

「分かった……………おい」

イグザードが後ろの青年を促した。

月光の明かりに浮かびあがった青年は、ひどくまじめそうで、痩せていて、背は低い。印象に残りそうにないくらい、その青年は地味だった。イグザードと並べば尚更だ。

それでも、けぶるような灰緑色の瞳だけは、優しそうで、印象に残った。

服装は簡素で、青い貫頭衣と、茶色い色のズボンを穿いている。

どんな人物なのだろう、とカサギが考えていると、金属が軽くこすれるしゃらしゃら、という音の後、格子が開いた。

「ほら、開いたよ」

「ああ。カサギ、こいつはサノッソ・トゥクファッソ。俺の仲間だ」
「よろしく」

サノッソは微笑んで、牢のなかに入ってくると、レイエネの様子を見た。

「精神的に参ってるって言っていたね。立てる？」

「なんとか、がんばるわ」

レイエネはそう答えた。どうやら起きていたようだ。

「無理はしないでくれ、レイエネ」

「そうだけ、無理しなくても、俺が背負ってやるから」

「そんな贅沢、ひとりだけ、迷惑……… かけられない」

言って、必死で立とうとするが、うまくいかずによるける。見かねたらしいイグザードは、溜息をついて、強引にレイエネを背中引き寄せた。

「カサギ、サノツソ、手伝ってくれ。この強情女に付き合っている時間はない」

「ああ」

「そうだね」

ふたり揃って頷くと、レイエネが抵抗するのにもかかわらず、イグザードの背中を押し上げてしまった。

それから大急ぎでそこを出る。

カサギには見慣れない木造家屋の床はかなりきしんだ。だというのに、追手のひとりも見当たらない。が、床に倒れて気を失っている男を見て、カサギは納得した。

イグザードには、良い仲間がいるようだ。

外に出ると、なんとなく空気が甘く感じられたが、それを味わう余裕は皆無だった。

とにかく今はここから逃げなければという思いに突き動かされて、カサギはイグザードらに続いて、懸命に走った。

薄ぼんやりとしたランプの明かりのもとで、大勢の若者が飲み食いしている。

そのなかに加わりつつ、カサギは、そこにいる全員の髪の毛がみんな淡い金か、蜂蜜色、もしくは銀髪なのにあだひたすら驚いていた。

カサギは今、レナドウの繁華街にある賭場の地下につくられた酒場にいた。

イグザードの話からすると、ここは彼ら、長老に反対する一派のアジトなのだそうで、レイエネもここにいる。といっても、彼女のいるのは休憩室のほうだ。牢から出て外の空気に触れてからは、安心したのか、すぐに眠りこんでしまった。

イグザードはというと、なにか自分たちだけで話があるとかで、カサギの目の前に果物の皮を剥いたものや、獣の肉を揚げたもの、菜っ葉をヤシの油で炒めたもの、ゆでたイモ、エビを揚げたもの、干したナツメヤシに、ヤシの酒といった食べ物や並べ、待っていると言いつつ、どこかに行ってしまった。

ので、これからどうなるのか、どうしたらいいのかはさっぱり不明だ。

とにかく、今はイグザードを信じて、待つしかない。カサギは小さく嘆息した。

よどんだ空気と、油の匂い。すえた臭いと酒の匂いとが入り混じった、こういう場所独特の匂い。幼いころを思い出す。よくこういうところで酔っ払いを狙って、スリを働いたものだ。時には、酔って気分の良くなった男に、なにか御馳走してもらえることもあった。そんなことを思い出しつつ、カサギは、目の前の酒に口をつけた。子供の飲むものではないが、薬としても飲用されているので、味は知っているし、もう飲んでも怒られない年齢だ。が、カサギはあまり飲んだことがなかった。

翌日、調子が悪くなったことがあったからだ。

口をつけた赤い色の酒は、果実を漬けたものらしく、甘酸っぱい味がした。

「飲んでいるかしら」

不意に上から降ってきた甘ったるい声に、びくつとして顔を上げる。

「あ、まあ、それなりに」

「そう、どうかしら、ここの食べ物や飲み物は、口にあう？」

「くせのないものが多いから、美味しいよ」

「そう」

声の主は嫣然と微笑んで、カサギの隣に腰を下ろして、手に持っていた木のカップの中身に口を付ける。

それを眺め、カサギは彼女の豊かな胸や、すらりとのびた手足をうらやましいと思った。カサギはちびなので、どうあがいてもそうはなれないのだ。

ゆるく波打つ蜂蜜色の髪や、ゆったりとした生成色の服。細められた瞳は、金褐色で、全体からするとやや濃い。

だからだろうか、なぜか彼女には親近感がわく。

「ねえ、あなたのお母さんの名前教えてくれない？」

不意に、問われる。カサギは、変な人だな、と思いつつ、答える。

「トウリーですが」

「やっぱねえ………それ、あたしの叔母さんの名前だわ」

女性はどこか物憂げに言った。

「あんた混血ね。その瞳の色………サラム人のものじゃないもの」

「え？ 今までなにも言われたことはないけど………？」

「結構色が濃いから、気がつかなかったのね。でも、あたしたちヴァト族の目には特徴があるのよ」

自身の瞳を指で示す。

「ほら、この金粉をまいたようなのがそれよ」

女性は、どこかいたずらっぽい笑みを浮かべたまま、告げる。

「はじめまして、というところかしら。あたしはフォシマ、フォシマ・サユトウミ。あなたにとっては従姉妹にあたる、イグザードの幼馴染よ」

「え、ええっ！」

カサギは思わず立ち上がって、にこにこ微笑む女性、フォシマを驚愕の面持ちで見やった。なんてことだ。もう今夜はいつぱいいっぱいなのに、と頭を抱えたくなる。

「カサギ！ あれ、フォシマか、ということとは、もう自己紹介したんだな」

「ええ。ああ！ 嬉しいわ！ あたしこんなかわいい妹ほしかったの！ ウチってばむさい弟ばかりで、ちらかすは汚すわもううんざり！」

大声で言つて、フォシマはカサギに抱きついた。

肩のところに胸があたり、その豊満さに、なぜ自分にはその要素がないんだ、従姉妹なのにと、悲しくなる。

「なにやってんだか……とにかく、カサギを返してくれ」

イグザードは呆れたように言つと、カサギの腕を掴んでひっぱつて、フォシマの腕から引き離れた。目を回しそうだったカサギは、大いに安堵した。

「あら、今まで誰が言い寄つてもうんともすんともいわなかったあなたが、女の子を独占しようとするなんて、ようやく恋に目覚めたのね。あたしが言い寄つてもだめだったから、てっきりこっちのケがあるのかと思つてたわ」

「なっ！ 俺はまともだ！ 考えるのもおぞましいことを言うな！ ったく、そんなだとどうせきちんと話してないんだろ。仕方ない……カサギ、サノツソたちと一緒に、あんたに話しておきたいことがある。ちょっと来てくれ」

「あ、ああ……そうだ！ なあ、フアナラトはどうしたんだ。ずっと聞こうと思つていたんだ。お前たちは一緒に連れて行かれただろっ？」

必死にそう訊ねると、イグザードの表情が曇った。

言いづらそうに、頭を掻いている。

カサギは、その様子に、胃が重くなったような気がした。

「あいつは、裏切つたんだ。牢に行くなり、俺の目の前で、自分にも協力させてくれと必死に訴えた。」

人間を滅ぼす手伝いをさせてくれと、何度も頭を下げて、床に這いつくばつて。見ていられなかった。そのうちに長老が来て、あい

つを連れて行った。おそらく、今は長老たちの手伝いをしているか、もう殺されているか、どちらかだろう」

「そ………んな、嘘だ！ 何で、ファナラトが！」

「あんた、言っただじやないか。あいつは、人間が憎いんだよ。血と肉の詰まった皮だっという例えからして、もう、取り返しがつかないくらい、憎しみに囚われてるんだ。」

俺は、あいつのあの狂気じみた顔を、忘れられない」

「………かも、しれない。私を裏切っても、あいつは、きつと、絶望してるんだ」

カサギは、泣きそうになるのをこらえて、イグザードの腕をつかむ。うつむいて、唇を引き結んで、それでも、再び顔を上げる。

「なら、絶望は晴れるってこと、思い知らせる。そのために、人間を全滅させるわけにはいかないんだ」

「………ああ」

イグザードは一瞬驚いて、それから嬉しそうに笑って頷いた。

「ふうん、めろめろじゃないの。まあ、いいんじゃないかしら、お似合いよ、あんたたち」

「えっ！ いや、なんでそんな話になるんだ？」

突然の浮いた話に、カサギは大いに困惑した。すると、イグザードは、諦めたように嘆息し、言った。

「こついうひとなんだ。まあ、俺は否定しないけど」

「否定しない………？」

カサギは、その意味を考えて、考えて、ようやく思い至った。

そして、思わず呼吸を止めた。

「ばばばばばかだなもう、いやいやいやもういい！ もう嫌だ！ ありえない。そうだ、そんなことありえないさ。はっはっは。」

なあイグザード、サノツソはどこにいるんだ。

なにか重要な話があるんだろ？」

壊れたように言葉を重ねる。

頭が真っ白で、叫びだしたいくらいだ。とにかく話題をそらそう

として、そう言ってみると、イグザードとフォシマは、顔を見合せ
て笑った。

カサギは、泣きたい気分で、叫んだ。

「なあ、サノッソは！」

第八章 祖先の思い

八 祖先の思い

薄ぼんやりとした橙色の明かりに照らされた室内で、レナドウの町とその周辺が描きこまれた地図を、その場の全員がのぞきこむ。

「どういうわけか、この町には、多くの地下道がある。かつては墓地だったらしいが、いまでは使用されていない。ここを使って、侵入しようと思う」

そう言ったのはサノツソだ。

驚いたことに、彼が反対派のリーダーだという。カサギはてつきり、イグザードかと思っていたが、彼はどちらかというと、行動専門らしい。頭で考えるのは、サノツソの仕事だそうだ。

(ようするに、荒事専門というわけか。イグザードは) 色々なことを整理しながら、カサギはサノツソの言葉に耳を傾ける。

「僕たちは先に侵入して、経路を確保。そのあとで、カサギさんたちに来てもらう」

サノツソは、全員が頷くのを見て、安堵のため息をつく。

「正直、見つからなければ、この計画自体も無駄になっていたところだった。助かったよ、イグザード」

「俺も、こいつに会えたのは偶然だったんだ」

「何の話だ？」

「ああ、まだ言っていないませんでしたね。僕たちの計画には、あるひとが必要だったんですよ。それが、あなたなんです、混血の血を持つ……タヴァト族と、サナラム人との橋渡しになれる唯一のひと。予言では、黎明の娘と呼ばれています。」

でも、長老たちはそれを阻止するために、信用できるものしか外に出しませんでしたし、よほどの例外でもない限り……混血は生

まれませんでした。密通したひとがいても、出来た赤子はすぐに見つかって殺されましたしね。

あなただけが例外なんです。

あなたの母親だけは、タイミングが良くて、うまく帝国まで逃げ込めたので、長老達にも手出しができませんでしたよ。

実は、僕たちの仲間を各地に出すのも大変で、あなたを探すのは無理だと諦めていたんですけど、運のちからですごいですよね。

まさか、帝国貴族になっていたなんて、しかも、イグザードと会うなんて、奇跡ですよ」

「ああそうか。それである時、イグザードは私の顔を見て、驚いていたんだな」

「まあね。まさか、トゥーリさんの似顔絵そっくりの女の子が現れるとは全く思っていなかったんだ。まさに一石二鳥だった」

イグザードは、肩をすくめた。カサギは、そんなことになっているとは、と思いつつ、ふと笑みを浮かべた。

「私が北部の遺跡に興味を持ったのは、そういう過去があったからなのかもしれない。ずっと、ここに来たいとは思っていた。まさか、母の故郷とは知らなかったがな。

母は、私を守って、父を殺して、私は、孤児院で育った。すごく小さい時で、その話も、孤児院の院長に聞いた話だから、あまり実感はわかかったんだ。

そうか……。

それで、私にしか出来ないこととはなんなんだ？」

カサギは独白めいてつぶやいた後、真剣な面持ちで訊ねた。

「レナドウの北に、セラマツゾという名前の遺跡があります。セラマツゾは、古代語で経典という意味なんですけど、そこに入れるのは混血のひとだけなんですよ。そこに、いま稼働しているナルマヴレ発生装置を止めるために必要なものがあります。

それを取ってきて欲しいんです。

ものについては知りませんが、行けば分かると文献に書いてあ

るので、大丈夫です。

で、それを使って、装置の破壊をしてもらいます」

カサギは、言われたことに絶句した。

「それは、最も肝心で、大変なことじゃないか。私なんか、頼んでいいの？　今の今まで、私は、部外者だったのに」

「いいもなにも、あなたにしか出来ないんです。僕たちは、あなたを信用して、ただ、動くだけです。もう、あまり時間がないんです。」

明日すぐに行ってください。

護衛には、イグザードと仲間の者をつけます。用心してくださいね」

「わ、分かった。全力を尽くすよ」

カサギは頷いて、息を吐いた。重圧だ。凄まじい重圧が、背中のしかかってくるようだ。すべての人間の命を背負ってしまった。

その背中が、優しく叩かれる。

「俺も付いてる。そんなに気負うな。今日は、ちゃんと休めよ」

「ああ、そうだな」

カサギは、力なく微笑んでみせた。

負けるものか、と思う。どれだけ怖くて恐ろしくても、やり遂げる。そんなことを思いつつ、カサギはサノツソの言に耳を傾けた。

明日の手筈についての確認が終わり、そこに集まった三十人ほどが、少しずつ外へと出て行く。なかには、カサギに声をかけてくれるものもいた。

「がんばってくれよ」

「私たちに協力してくれて、ありがとうね」

「期待してるぜ」

「裏切ったらゆるさねえぞ、なんてな。頼んだぜ」

などと言われ、カサギは笑って答えたが、それだけで精いっぱいだった。不安に押しつぶされそうだった。

カサギは、ぼつんとつぶやいた。

「……………私には、見たいものがあるんだ」

「カサギ？」

「見たいものがあるんだ。イグザード……………私は、広い世界を、この目で見たい。どんなものがあるって、どんな生き物がいるのか、知りたい。」

そのために、明日は、命をかけようと思うんだ」

カサギは、静かに言った。部屋が、少しずつ静かになる。サノツソも、手を上げて挨拶して、出て行って、部屋には、ふたりだけになった。

「私の命、お前にあずけるよ」

カサギは唐突に言った。二人の間に、言葉では表せない、信頼のようなものが流れる。イグザードは困ったように笑うと、頷いた。

「分かった」

「休もう。明日は、戦いなんだから」

カサギはそう言うと、テーブルの上のランプに近寄り、手に取った。

その淡い光が、なんだか人間の命の灯のような気がして、この火を守るつもりで臨まないとならないな、とカサギはひっそり決意を胸に刻んだ。

早朝の澄んだ、冷たい空気のなか、カサギはセラマツゾ遺跡にいた。

まだ弱い曙光に照らされた遺跡は、なんだか墓地のようだ。実際、それは土を盛っただけの墓と酷似している。ただ、大きさが違う。それは、巨人でも葬ったんじゃないかと思えるくらいに、大きかった。

盛り土のうえは背の低い草で覆われている。

「これが、そうなのか」

つぶやいて、入口を見やる。

ぼっかりと、石組みの通路が見える。誰でも気軽に入れそうだが、

うっかり入ると罨が作動して、押し出されてしまうという。

「ここは、タヴァト族の祖先たちの墓なんだ」

イグザードは、どこか神妙な面持ちで言った。

「そうか。私は、そんな場所に行くのか、たったひとりで」

ふと、弱音が漏れる。横に立ったイグザードが、かすかに息をのんだ。だが、気休めはいらない。カサギは、ぐっと顎を上げて、大股に進み、立ち止まることもなく石室へと足を踏み入れた。

すると、後ろ手なにかが落下したような大きな音がし、真っ暗になった。

「なんだっ！」

驚いて振り返ると、壁がある。入った瞬間に、上から落ちてきて閉じたらしい。外で、叫び声があがる。

「カサギ！ 大丈夫か！」

ややくぐもった声は、イグザードのものだ。

声を失っていたカサギは、炎の燃えあがる音にびくり、と体をすくめた。奥のほうで、大きな炎が赤々と燃えている。最初はまぶしかったが、次第に目が慣れてくると、落ち着きを取り戻すことができた。

「私は大丈夫だ！ いまから、石室のほうへ向かう。心配するな！」
そう外に向かって叫ぶと、カサギは一直線に伸びた通路を、歩き始めた。

たいした距離ではなく、ほんの数十歩で、目的の場所へとたどり着く。

カサギの眼前にひろがっているのは、供物を乗せる石台と、金属製の巨大な炎を吹き上げる篝火だ。その奥に、棺が五つ、放射状に並んでいる。

一番手前の供物台には、石板が乗せられている。

カサギはゆっくりとそれに歩み寄り、文字を見やる。なんとか、読むことができそうだ。確か、古代語だったと思う。まだ、サナラム半島が砂嵐とわず潮に閉じ込められていなかった頃、大陸から渡

つてきた者たちの使っていた文字だ。

それを見て、カサギの脳裏に、教授の手にしていた銀貨が浮かんだ。そうか、教授は、タヴァト族が、この半島出身ではないと気づいたから、殺されたのか。ひとつほどけた疑問に、カサギは気を引き締めた。

その教授のおかげで、なんとかなりそうだ。彼に報いるためにも、ナルマヴレを破壊するものを手に入れなくては、と思う。

炎の明かりがちらちらして、結構読みにくい。顔も熱くなってきた。目を眇め、眉間にしわを寄せつつ、内容を声に出してみる。

「なにに、我々は、ついに新天地を発見した」

カサギは、文字を手でなぞりながら読み進める。

ややとがって、角ばった神経質そうな文字だ、と思う。現代使われている文字は流線型で、やさしい印象なのだ。

「我々は、自然現象に働きかけるすべを知ったために、戦乱に巻き込まれて、利用され、多くの同胞を失ってしまった。

ゆえに、ここまで逃げて、我々だけの新天地を探し求めた。

だが、ここには先住民がいた。彼らは、ようやく農耕をはじめたばかりであった。我々はすこしばかり手助けをしたが、彼らは少しずつ、我々の持つちからに気付きはじめた。

我々は危機を感じた。

そして、やはり戦乱が起こった。我々は再び巻き込まれ、多くの同胞を失った。

その時。外からも侵略の手が伸びてきていた。

我々は、長命であることを呪った。自然に愛されたゆえに、我々は普通のひととは異なる寿命を持っていた。もともとのつくりが違う。異種族なのだ。

ならば、なぜ滅びねばならない。穏やかだからか。争いごとを好まぬからか。欲をあまり持たないからか。

我々は、生き残るために、ナルマヴレを作り上げた。それは、自然に逆らう行為だったため、我々は寿命が人間と同じになり、人

間になった。

それでも、我々はナルマヴレを発動させて、後世の者に希望を託した。

ここに残すのは、ナルマヴレの破壊に必要な物品と呪文である。また、ここに立ち入れるのは、我々と、先住民族との混血だけである。なぜならその者は希望だからである。はじまりだからである。違う民族でも、子をなし、つながりあうことができる証明だからである。

我々が託すのは希望である。

この思いを、受け継いでくれるものが現れることを切に願う」

読み終えて、カサギは、静かに目を閉じた。

次いで、五つの棺に向かい、頭を垂れた。

そして、供物台の石版を持ち上げてみる。その下のくぼみに、小さな石版と、なにか植物の種らしきものがある。

「これだろうか」

手に取り、一体どう使うのだろう、と訝しんでいると、背後で大きな音がした。と、同時に、燃え盛っていた炎も消える。頬に残ったほてりを感じつつ、そこから吹き込む清かな風に目を細めた。

用は済んだ、ということなのだろう。

カサギは、腰に吊るした小袋に、ひよこ豆ほどもある五つの種子を放り込み、石板はしっかりと手に持って外へ出た。

日差しが目を焼く。まぶたを閉じると、誰かが走り寄る気配を感じた。

「カサギ！ 無事だったか……………良かった」

「心配することなんかにもない。ここは、お前たちの祖が残した場所だろう。先祖を信じてやれないのか？ それより、襲撃なんかはなかっただろうな？」

「あ……………ああ」

間の抜けた様子で頷くイグザード。カサギは苦笑して、手に持った石板を見せた。

「あつたよ。私は、託されたんだ………タヴァト族の捨てきれなかった希望を」

嬉しくて、カサギは言った。不安が一掃されたみたいない気分だ。

「なにがあつたんだ」

イグザードが首をかしげて不思議そうに問う。

「後で、ちゃんと話すよ。このあと、乗り込むんだろう?」

「ああ、さっき報告があつて、長老たちが、ナルマヴレを完全に開放するために儀式を始めてしまったらしい。

今日が、山場だろう」

「行こう。私は、託されたんだ。決して、その思いを無駄にしたいから」

「ああ、終われば、色々と話も出来るしな」

イグザードは、そう言うてにやりと笑った。

「そういうことだ。よし、行こう!」

カサギは、イグザードと共に見張っていてくれた者たちも含めて、呼びかけた。

「こつちだ。みんなで、力を合わせて、全力を尽くそうぜ」

「ああ。おれたちで、あんたは守ってやるよ」

明るい返事が返ってくる。カサギは、笑顔で「ああ!」と頷いた。

第九章 終わりの音

九 終わりの音

ひとが死ぬ音が聞こえる。

カサギは、静けさに満ちた心で、悲しみを封じ込めて、歩を進める。

レナドウの市街地の中央広場。その地下にひろがる、ナルマヴレの場。かつては、地下聖堂であった場所だ。

あらかじめサノツソらが経路を切り開いておいてくれたおかげで、カサギとイグザードとレイエネは、まっすぐにそこへと到達することができた。

道案内のかたわら、小さな戦闘はあった。

倒れて冷えていく死体を見て、カサギはなぜ滅ぶために剣をふるうのだろう、と悲しみに暮れそうになった。が、掌に握られた種が、それを癒してくれた。

前に進め、と言ってくれている気がするのだ。

橙色の松明に照らされた通路は不気味だったが、不安は感じなかった。

見事に石が組み合わされている。崩れないよう細心の注意を払い、高度な技術を使って建造された場所であることが、様々な遺跡を見つけたカサギには良く分かる。

いったい、どんな思いで、タヴァト族の祖先はここを作り上げたのだろう。

カサギは、もう何十回も読んだ石板に視線を落とした。完全に暗記したが、それでも決して、安心することはない。一言たりとも間違えられないという重圧が、そうさせるのだ。何度確認しても、絶対ということはない。

種の使い方も書いてある。

「平和のためにやっているのに！」

唐突に、叫び声上がる。

「大量虐殺しようとしている野郎の言うことじゃねえよ！」

イグザードは、そう怒りに満ちた声を返すと、直線的な動きで、斬りかかってきた見張りを切り殺した。一瞬の躊躇もない。

もう、何人目だろうか。

殺すな、などとは言えない。今は、時間が惜しいのだ。

結論からいえば、これはタヴァト族の内輪もめなのだ。そのせいで、大勢を巻き込んでしまった。だから、命を惜しむなど、恥ずかしくて出来ない。フォシマはそう言つて、サノツソらとともに先行していった。カサギは、決意に満ちた従姉妹の顔を思い出し、こんな事態になってしまったのはなぜだ、と悲しんだ。

道の途中で、サノツソやフォシマら、反対派のメンバーと合流する。

「かなり、見張りがいたわ。嫌だったけど、みんな始末したわよ」

「助かるよ。本当は、君にそんなことさせたくなかったんだけどね」
「あたしの剣の腕は、そこらの男どもより上だもの。いいのよ。それに、こうしてあなたや、みんなの役に立てることの方が嬉しいわ」

フォシマは、艶やかに笑つて、腰に吊るした長剣の柄を叩いた。

なんとなくわかった。フォシマは、サノツソが好きなのだろう。

その気持ちが分かる気がした。サノツソは、地味だが、決断力に優れ、頭もいいし、優しい。

サノツソも、フォシマが好きなようだ。

未来がある。未来が見える。けれども、それは破壊されようとしていて、カサギは、やりきれなさを感じつつ、歩を進めた。未来を勝ち取るために。

やがて、大きく開けた場所に出る。

最長老が、長老たちとともに、儀式を行っていた。

その傍らには、彼らに賛同する者たちが武装して警護に当たっている。そのなかに、フアナラトの姿を認め、カサギは呻いた。

彼に目を向けると、フアナラトは冷たい目でカサギを見返してき

た。傲岸なまでの決意が、その美しい顔には宿っている。カサギは、顔を反らして、長老たちを見やる。

彼らの中央には、巨大な水晶球があり、砂嵐を映し出していた。いままさに、砂嵐がひとつの町を飲み込もうとしている。

カサギは、そこで展開されていることが信じられなかった。

これは、現実なのか？

信じられない。はるか昔に、こんな技術があったとは。そんな思いに囚われかけて、カサギは頭をふった。

「そこまでだよ。」

ガメス最長老……… 僕はすでに選ばれた民なんかじゃないんだ。もう、サナム人となんら変わりのない、人間なんだよ。他民族が他民族を裁くなんて権利は、存在しないんだ」

サノツソの穏やかな声が、静かだった聖堂に響き渡る。

と、緩慢な動きで、最長老のガメスが振り向いた。

厳しい表情は微塵もくずれず、傲慢な雰囲気もそのままだ。牢で出会った時から、決して相容れないと確信していた。その考えは、彼の表情によって、さらに強まった。

水晶球から放たれる青白い光が、聖堂内を照らしている。

最奥部には祭壇があり、その手前に水晶球が、むき出しの土の床に、半ば埋まるように設置されている。長老たちはそれを囲むようにして、立っていた。

「そんなことは分かっている。だが、我々は、もう諦めたのだ。この美しい世界を守るためには、これしかない」と決断をしたのだ。

何者だろうと、邪魔はさせぬ」

ガメスはそう言うと、水晶球の上をそっと撫でた。

唸るような音がして、長老たちとカサギたちの間に、薄い壁が現れる。

「あやつらを殺すのだ。我らに刃向かう反逆者を！」

ガメスは怒号をあげた。

武装したタヴァト族たちが襲いかかってくる。

「迎え撃て！」

サノツソが鬨の声を上げる。反対派の仲間たちが、武器を打ち鳴らして、仲間であった者たちに襲いかかっていく。それを見届けたサノツソは、カサギに向き直った。

「カサギ、あの壁をなんとかしてくれ」

「分かった」

カサギは頷いて、防壁が作動した際の解除呪文を叫ぶ。

「聞き伝え………痛みの徒は泣き叫ぶ、出会いがしらの過ちを、二度咲きの、花を捧げて鎮魂せよ！」

言霊が放たれると、ガラスを打ち鳴らしたような音がした。続いて、ガラスが割れて砕けるような、ガシヤアアンという音がして、薄青い防壁が砕け散る。

「なんだと！ 貴様、混血の娘か！ 牢から逃げたな！」

「そうだ。私は帝国よりの使者、カサギ・プロウウィン！ この愚かしい過ちを見過ごすつもりはない！ お前たちの先祖の思いをつなげるために、やってきた！」

カサギは朗々と告げる。

次いで、走り始める。水晶球のまわりには、五角形と丸でつくられた陣が描かれている。まずは、そこに種を埋めなくてはならない。カサギは身を低くして走り、握った五つの種をひとつの丸に埋めていく。途中で長老のひとりにぶつかり、転倒させる。

ここしばらく外で暮らしていたから、体が反応についてくるようになり、転びにくくなった。それが、今はとてもありがたい。

「この！」

タヴァト族の青年が、短剣をふりまわす。が、カサギはその小柄な体躯を活かして、にげまわった。

聖堂は、一気に血なまぐささを増す。

「カサギ！ なぜ邪魔をするんだ！」

「ファナラトっ！」

カサギは、振り下ろされた剣を、横とびで避けて、ファナラトと

対峙した。次いで、腰から短剣を抜き放つ。護身用に、とイグザードから渡されたのだ。カサギは躊躇なく、その切っ先をフアナラトに向ける。

「大学院に入ってから、ずっと一緒だっただろう！　なら、僕の思いも知っているはずだ！」

「ああ、分かっているさ。お前は这个世界が憎いんだろう？　醜い人間が大嫌いでたまらないんだろう？　けど、私はそう思わない！」

だから、今のお前は私の敵だ！　退かないというのなら、攻撃する！」

本音でありながら、本心ではない言葉を、カサギは長年の友に浴びせた。

フアナラトは、光のせいかわ顔が青ざめて見えた。フアナラトは、カサギの言葉に衝撃をうけたらしく、立ち尽くしている。だが、その背後から飛び出してきた槍の先が腕をかすめると、眼光鋭くカサギを睨んだ。

「ならば僕も、君と殺しあう！」

フアナラトが地を蹴る。

カサギは、身を低くかがめて、フアナラトの足を狙う。殺したくない。が、せめて動きを止めなければ、彼はひたすらカサギを狙い続けるだろう。

「カサギっ！」

イグザードが名を叫んでいる。

しかし、彼は長老たちを拘束するのに手が離せないでいる。カサギはその声に応えることはせずに、フアナラトに体当たりをした。「うわっ！」

フアナラトは姿勢を崩して尻もちをつく、その隙に、種を埋める種は埋められるとすぐに芽吹いて、水晶球を絡め捕っていく。それが、封印なのだ。

そうやって五つ埋めてから、呪文で成長させ、完全に破碎するのだ。

「くそっ！」

「私も、いつまでもドジではないんだ」

カサギは悲しみをこめて言うのと、次の種を埋めようと動く。だが、「僕だって、大貴族のはしくれた。剣技なら幼少から叩きこまれて
いる！」

カサギ！

ひとは滅ぶべきなんだ！　こんな互いに憎み合うだけの、愛すら憎しみに変えてしまえる愚かな生き物は、滅ぶべきなんだ！」

いつも穏やかで、優しくかったフアナラト。

いつも、少し寂しそうで、悲しそうだった灰褐色のその瞳は、絶望一色に塗り込められている。

カサギは、それを見て、一瞬ためらった。

まっすぐに、剣の先がカサギの心臓めがけて突き進んでくる。

避けられない。

カサギは、せめて急所だけは外さなければ、と咄嗟に身体を横へと移動した。その時、

「カサギだけはやらせるものかあっ！」

怒号が、耳に突き刺さった。

それは、レイエネの、喉からほとばしり出た慟哭だった。

次いで、肉を刺し貫く、湿った鈍い音がふたつ、聞こえた。カサギは、意識が暗闇に飲み込まれるくらい、痛烈な痛みを覚えた。

「あ、あ……………ああっ！　嫌ああああああああっ！」

視界いっぱい、剣先の突き出たレイエネの背中が映る。その向こうで、フアナラトが口から血を吐いて、ゆっくりと崩れ落ちて行くのが見える。

なぜか、ひどくゆっくりと。

「ごめん……………な、カサギ。ごめ……………ん」

フアナラトは、最期に微笑んで、地に倒れた。

涙が、あふれ出てぼたぼたと零れおちる。レイエネは、呻いて、剣を腹部から引き抜くと、振り向いて、叫んだ。

「カサギっ！ あなたは、やるべきことをやって！」

「う……………っ！」

泣いて、くずおれてしまいたい感情の嵐のなかで、カサギは、きつ、と顔を上げて、残り三つの種を埋めにかかった。

「くそおお！ させぬぞ！」

「往生際が悪いんだよ！ いい加減に観念しろ！」

イグザードが怒鳴る。

「黙れ小僧！ 我らの積年の悲哀を！ こんな形で壊されてなるものか！」

ガメスは砂ぼこりにまみれ、擦り傷だらけの姿で、落ちていた槍を拾い、投げた。それはカサギに向かって一直線に飛ぶ。

が、手前でフォシマによって叩き落とされる。

「この子に手出しはさせないよ！」

「よし、かなり数が減ってきたな……………ガメスを捕えろ！」

「くそおお！」

ガメスは血を吐く勢いで叫んで、その場に小規模な砂嵐を起こした。

カサギは、ただ必死で種を埋めた。そしてついに、最後のひとつを埋め込んだ。

ぐっ、と顔を上げて、必死で頭に叩き込んだ呪文を、紡ぐ。

「歴世の余波をうけし悲しみの民！」

諸刃の剣を宿した命！

別言に振り廻されて、宿命の理を曲げぬ！

永らえることのみが幸福にあらず！

いざ天秤の示した仁恕を現せ！」

言葉に呼応し、芽吹いた蔓草がめきめきと育つ。棘を生やし、硬い樹皮に覆われた茎は水晶球にからみつき、ひびを入れていく。

「我、予言の子ども、我はここに宣言する！」

長きに渡った契約を破棄する！」

カサギは最後の言葉を放った。

最初はちいさな、小石を固い床にばらまいたような音がひびく。それは少しずつ大きくなっていき、やがて、派手な破砕音とともに、砂嵐を生み出し、映し続けていた水晶球は、凄まじい破砕音と共に碎け散った。

カサギは、空中にキラキラと舞うその破片を見て、その場にひざをついた。

視界に映る幻想的なその風景を、ただながめる。

美しく、物悲しい光景だった。

青白い明かりは消え去り、仲間たちの持つランプの、橙色の光が、代わりにそこを暮色に染め上げる。

そのなかに、動かなくなってしまうレイエネの姿もあった。

終わったのだ。

様々なひとやものを巻きこみ、多くの悲しみから生まれ、悲しみを生み出すモノは消え去ったのだ。しかし、人の心はそのままだ。

第二、第三のナルマヴレが生み出されないと限らないのだ。

カサギは煌めく破片を見つめながら、静かに涙を流した。

終章 これから

終章

巨大な斧が、陽光を受けて不気味に輝く。

レナドウの中央広場。

よく晴れて、澄み渡る空気のなかで、いままさに、すべてに決着をつけるべく、血が流されようとしていた。

カサギは少し離れた白い石積み建物のなかから、その光景を見下ろしていた。

自分たちの、行動の結果を。

間違っているとは、今も思っていない。けれど、ここまでしなければならぬのだから、と考える。

清かな風が頬をなせる。

カサギの瞳には、集まったタヴァト族の者たちと、帝国から派遣されてきた軍と、その軍を率いてきた皇太子の姿が映っている。

中央広場は、まさに押せ押せといった状態だった。であるのにもかかわらず、叫んだり、怒号を上げたり、泣き叫ぶ者、または、歓声をあげるもの、野次をとばすものすらおらず、ただひそひそとさやきが交わされるのみだ。

それは、異常な風景に見えた。

遠く離れているために、カサギには、はっきりと音が聞こえてこない。

いま、皇太子がなにか口上を述べているが、声は聞こえない。けれども、言っていることの意味は分かる。

これから行われる処刑がなんのためのものか、を叫んでいるのだ。「あの乱闘騒ぎで、死ななかつた長老たち。殺す必要はないはずなのに」

カサギはぼつり、とつばやいた。

あの乱闘の際、長老たちはかなり抵抗し、その大半が殺された。いま、広場の中央に集められた長老たち三人は、そのわずかな生き残りなのだ。

そのなかにはあのガメスもいた。

彼らは、見せしめのために死ななければならぬ、と皇太子には言われた。

カサギは、そのやり方では、結局ふたたび同じことが繰り返されるだけだと言った。言うことしか出来なかった。

情けない、と思う。

(しかし、それは私の思惑が及ぶところにはない……結局、長老たちが言っていたこともまた、真実なんだ)

それを認めた上で、カサギは止めることを選んだのだ。

(それでも、生きていたいと願う者たちを殺すのは、間違っている。それだけは、決して奪ってはならないものなんだ)

皇太子が口上を読み上げるのをやめて、手を振り下ろした。

と、同時に、斧が風を切り裂く音ともに振り下ろされる。その瞬間、カサギは、ガメスがこちらを向いて微笑んだのを見た。思わず目を瞠る。声が喉からもれた。

「何………で？」

カサギは、ガメスの真意を測りかねて、呻いた。自然と目頭が熱くなり、涙が頬を伝って、床に染みをつくった。

なんとなく、後は頼んだ、と言われたような気がしたからだ。

あくまでも、気のせい。しかし、カサギは、そう思い込むことにした。彼らの思いを引き継ぐものがないのは、あまり悲しすぎるから。

「それなら私は、あなたたちの言葉を確かめに行こう」

カサギは、すでにこの世のものではなくなっている長老たちに向かって、礼をした。

そして、その部屋からそっと立ち去った。

処刑の翌日に、レイエネの遺体を埋葬した。

場所はレナドウの南にある丘の上で、他にもあの戦いで死亡したタヴァト族たちが土の下で眠りについている。基本的に、タヴァト族も、サナラム人と同じく、死者はいずれ復活をすると考えている。神はすべてをつくり、全てを支配して、復活の日に、裁定を下すという。

サナラム半島では、神は父であり、母であり、祖先であると考えられている。だが、タヴァト族にとって、神は創造者であるだけだ。

そのため、墓石はただの目印でしかなく、石を突っ立てただけの簡素なものだ。

葬儀らしい葬儀はしないが、別れの儀式はする。

埋められてしまえば、復活の日まで会うことはないからだ。

空気は乾燥していて、雨季の終りが近いことを告げている。この付近も水が不足気味になるそうだ。花も咲かない。

「私をかばって戦ったせいで、多く血を流させてしまった。そのせいで、レイエネは、亡くなってしまった。私の弱さが、彼女を殺してしまったんだ」

カサギは、感情を殺した顔で、呻くように言った。

「けど、そのおかげで、どれほどたくさんの人々が救われたか、を考えると、まさに彼女こそ英雄なんだと僕は思うよ」

スコップを手にしたサノツソが言う。

「ああ」

胸に去来するすさまじい感情の波にもまれながら、カサギは頷くしか出来なかった。

「あいつとの別れも済ませたのか？」

イグザードが問う。カサギはこくつと頷いた。

あいつ、とはフアナラトのことである。彼は、このレナドウの地に葬られた。彼の荷物から遺書が出てきて、トウニット家の墓地には葬らないでほしい、と書かれていた。恐らく、死ぬことを予測していたのだ。

彼の遺体はレナドウの北部にひろがる墓地に埋められた。

カサギは、首に掛けた円筒形のペンダントを手に取る。

そこには、切り取ったフアナラトの髪が入っている。忘れちゃいけないと、思ったからである。彼の言葉を、思いを。また、どんなに仲が良くても、決して、相容れないこともあるのだと思い知らされたことを。

「ねえ、カサギはこれからどうするの？ 帝都に、帰っちゃうの？」

「ああ、一旦はな」

フォシマの問いに、そう答えて、カサギは苦笑した。

「一旦？ その後はどうするつもりだ？」

イグザードが、何か言いたそうな様子で問う。

「私は、天涯孤独の身になって、旅をしようと思う。確かめたいんだ……。タヴァト族たちをここに追い込んだものはなにか、とか、祖先たちはなぜ不思議な能力をさずかっていたのか、とかをな。そのうえで、フアナラトや、ガメスの言葉について、もう一度考え直してみたいんだ……。世界を、見てみたいんだ」

カサギが語ると、全員が啞然として黙りこくった。

「貴族の身分を捨てるっていうの！ もつたいない」

フォシマが、首を左右に振り、天を仰ぐ。サノツソは、困ったように笑っている。イグザードは、怒りたいのか、それとも笑いたいかよく分からない顔をしている。

「私は後継ぎにと望まれて養子になったのだけれど、旅立ってしまったのなら、それが礼儀だと思うんだ。帰ってこれる保証もないのに、待っててくださいなんて虫のいいことは言えないから、ちゃんと、別れてこようと思うんだ」

カサギは微かに微笑んで、手に持っていた花を、レイエネの墓石に手向けた。

それから、墓石に背を向けると、歩き出す。

「お、おい！ どこ行くんだ？」

「いま言っただろう？ 帝都へ戻るんだ。みんな、いままでありが

とう。生きて帰ってこれたら、また会いにくるよ」

カサギはさりと別れの言葉を述べると、再び歩き始める。

「元気でね！」

フォシマの声がする。

「あまり危ないことはしないでくださいね！」

サノツソが叫んでいる。イグザードはまだ啞然としていた。カサギは振り向いて、三人に向かって手を振り、頭を下げると、街道へ向かって歩き始めた。旅支度は、すでに整えてきてあるから、このままいける。

皇太子に、一緒に帰ろうと言われたのだが、カサギは丁重に断った。一応、自分が、今回の功労者というか、英雄扱いされているのは知っている。

皇太子殿下と戻れば、それこそ大騒ぎだ。

ひっそりと行動したいカサギには、迷惑だった。

だから、ひとりで帰る。

すると、後ろから足音がした。

「ちょっと、待て！」

イグザードだった。彼は走ってくる、カサギの肩をつかんで、困惑顔をした。

「何だ？ 見送りならいらぬぞ。ああ、お前も元気でな、イグザード」

カサギは、彼の真意が分からないので、そう返した。どのみち、ずるずるとここに居るわけにもいかない。早く旅立たねば、宿場に辿りつくことができなくなる。時は昼餉時に近いが、食事は夕餉までガマンしなければならぬ。でなければ、たったひとりで野宿などという危険な目にあう。それは是が非でも避けたかった。

「いろいろと世話になった。特にお前には……… 本当に、ありがとう」

イグザードとの別れは辛かったが、もう、決めたことだ。

カサギは一旦決めると、決して後にはひかない。

振り返っても、どうにもならないことを、経験上知っているからだった。

が、イグザードは、不満そうに顔をしかめた。

「俺言つたよな、あんたを手伝ってやるって」

唐突に、イグザードは言った。カサギは、首をかしげて、頷いた。

「ああ、色々と手伝ってもらった。お前は、私に人を見る目があった生ける証明だ」

「だろ、俺がいたら役に立つ。だから、俺も行く」

「……………冗談に付き合っている暇はないんだ、じゃあな」

カサギは顔をしかめて、そう言い放つと、再び歩きだす。

「冗談言ってるんじゃない！俺は本気だっ！」

カサギはイグザードの叫びに、足を止めた。

「あんただけじゃない。どうせ俺だってひとりだ。家族はいない…

……………気に病むこともないぜ。っていうか、あんたがなんて言おうと、俺はついていく」

「お前、なにげにバカだな」

改めて向き直り、カサギは半眼でイグザードを見て言った。

「なんだと！俺の頭はいいほうだぞ！」

「そういう意味のバカじゃなくて、なにがあるのかわからない場所に行くなんて、死に行くようなものなんだぞ？」

「そういうならあんたのほうもつとバカだろうが！こんなちっ

こい女ひとりで、それこそ死に行くようなもんだ！俺が行けば、もう少し寿命がのびるぜ」

イグザードは自慢げに自身の胸を叩いた。

カサギは、いちいちび扱いされてむっ、としたが、その都度言い返すのもなんだか疲れるので、

「勝手にしろ」

と答えた。

「よし、待ってる！大急ぎで旅支度してくるからな！逃げんな

よー」

「なんで逃げなきゃいけないんだ！」
つい怒鳴り返す。

が、イグザードは、凄まじい速さで町まで走って行ってしまい、あつという間に姿が見えなくなってしまう。カサギは、溜息をついて、再び歩き始めた。

ふと、心が浮き立っているのを感じる。

少し前までは、静かで、水の底に沈んで行きそうな気分だったのに。あいつのせいか。だとしたら、これはきつと、嬉しいんだ。カサギは、ふつ、と笑った。

立ち止まり、振り向く。

視界いっぱいには、レナドウの町並みが広がっている。

やわらかな緑のひろがる平地に広がる、薄い茶色の、ヤシの葉で葺いた屋根をもつ家々。ここから見ると少し頼りない外壁に囲まれて、今日も人々を包んでいる。その外には、トニコヤシの木が茂っている。この乾いた半島で唯一良く育つ植物。ひとの五倍ほどにもそだつその木の木陰は心地よく、取れる木の実はじつに美味しいし、貴重な木材でもある。命のたくましさを証明するような植物だ。その木のもとに、タヴァト族たちは安住の地を見出したのだろうか？ 風が、カサギの濃い茶色の髪を揺らす。

ここで、母は生まれて育ち、旅の男と出会い、駆け落ちをした。愛して、愛された。なのに、最後には別に女をつくられ、男をつくり、互いに殺しあった。

カサギは、母譲りの金色の瞳を大きく開いて、その光景を目に焼き付けた。

しばらくすると、背に荷をかついだイグザードが走ってくる姿が見えた。変な知り合い方だったのに、長い付き合いになりそうだ。

カサギは、手を振って笑った。

大地はひらかれた。

これから、新しい時代がはじまるのだ。

その時代を、彼とともに歩くのも、悪くはない。いや、むしろ、楽

しいかもしれない。

そう、思った。

やがて合流したふたりは、ともに街道を進み始める。
その頭上を、鷹が二羽、見送るように舞っていた。

了

終章 これから（後書き）

最後までお読み下さり、ありがとうございます！
できましたら、感想や評価などを頂けると嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0811g/>

レナドゥの経典

2010年10月8日15時29分発行